

志 登 遺 跡 群

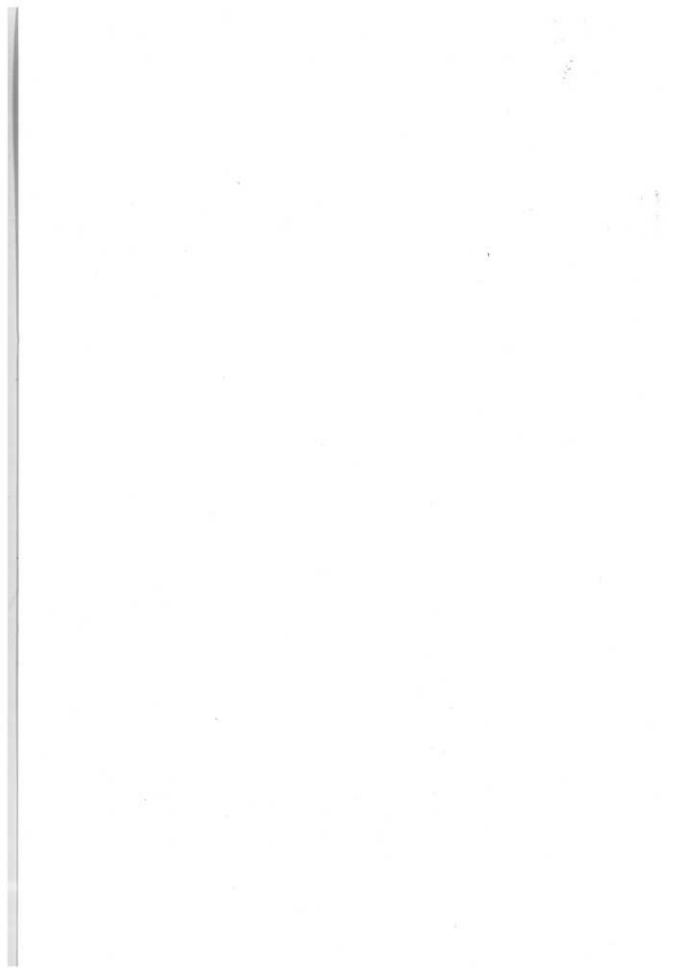
第4次発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第 20 集

1985

前原町教育委員会

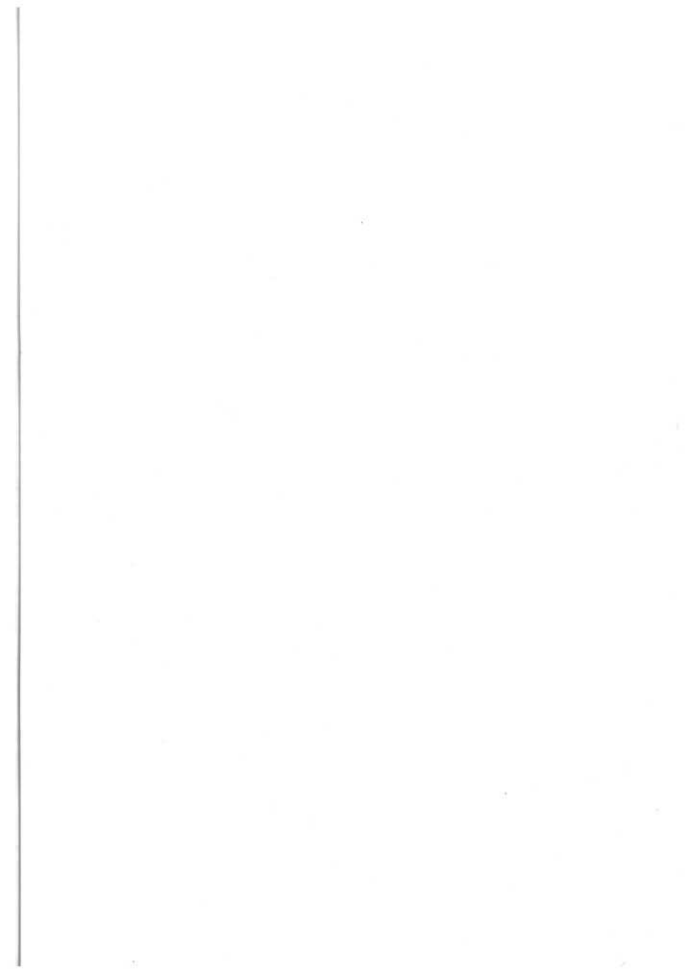


志 登 遺 跡 群

第4次発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第 20 集



序

この報告書は、泊地区果営ほ場整備事業に伴い、前原町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

本町では、昭和55年以来、ほ場整備事業に伴う発掘調査を実施しておりますが、今回の調査においても、事業の主体である福岡農林事務所および前原町土地改良区には、文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただき、調査を実施することができました。

本書が、国民の大切な財産である文化財の保護・保存のための一助となり、また、私たちの郷土の歴史を明らかにするひとつの手がかりとなれば幸いです。

最後に、今回の調査に際して、理解と協力をいただきました地元をはじめ関係の方々に心から感謝申し上げます。

昭和60年3月30日

前原町教育委員会

教育長 豊島禮蔵

例 言

1. 本書は、昭和59年度泊地区県営ほ場整備事業の施行に伴い、前原町教育委員会が昭和59年7月13日から同年10月29日の間実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 志登遺跡群においては、昭和29年に文化財保護委員会によって行われた調査を第1次調査、昭和57、58年に当教育委員が行った調査をそれぞれ第2次、第3次調査とする。
3. 昭和59年度に行った調査については、大字志登325番地の2他における調査を第4次調査とし、大字志登343番地における調査を第5次調査とした。
4. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図および前原町都市計画課保管図から作成した。
5. 遺構の実測は、川村 博・常松幹雄・石井扶美子・村田文秀・林 覚が行い、写真撮影は、川村 博・常松幹雄・林 覚が行った。
6. 遺物の実測・製図・写真撮影は、川村 博・林 覚・岡部裕俊・石井扶美子が行った。
7. 本書の編集・執筆は、岡部裕俊・川村 博・林 覚が行った。

本文目次

	頁
I. 調査にいたる経過	1
II. 位置と環境	5
III. 遺構と遺物	5
1. 概要	5
2. 竪穴式住居	5
3. 掘立柱建物	9
4. 井戸	25
5. 土壌	37
6. 溝状遺構	40
7. ビット内の出土遺物	41
8. 包含層の出土遺物	43
9. 下層出土の一括遺物	45
10. むすび	47

図版目次

図版 1	調査区（北より）
	同上（南より）
2	調査区（東より）
	SC01
3	SC05
	SC06
4	SE01
	SE02
5	SE03
	SE04
6	SE05
	SE06
7	SC05・06出土土器
8	掘立柱建物ビット内出土土器

- 9 S B16ピット内出土瓦
S E02・04出土土器
- 10 S E02出土櫛
S E02出土貨幣
S E03出土土器
- 11 S E04出土木製椀
S E05出土木製品
- 12 S E05出土土器
- 13 S E05出土土器
井戸出土土鍬
ピット出土遺物
- 14 P-204出土高麗青磁
P-41出土玉類
包含層出土土器
- 15 包含層出土石器
下層出土土器
- 16 下層出土土器

挿 図 目 次

第1図	発掘調査作業風景	1
第2図	周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第3図	発掘調査地点 (1/5,000)	4
第4図	竪穴式住居出土土器実測図 (1/3)	7
第5図	掘立柱建物S B01実測図 (1/50)	8
第6図	S B02実測図 (1/50)	9
第7図	S B03実測図 (1/50)	10
第8図	S B04実測図 (1/50)	10
第9図	S B05実測図 (1/50)	11
第10図	S B06実測図 (1/50)	12
第11図	S B07実測図 (1/50)	13

第12図	S B 08実測図 (1 / 50)	14
第13図	S B 09実測図 (1 / 50)	15
第14図	S B 10実測図 (1 / 50)	16
第15図	S B 11実測図 (1 / 50)	17
第16図	S B 12実測図 (1 / 50)	18
第17図	S B 13実測図 (1 / 50)	19
第18図	S B 14実測図 (1 / 50)	20
第19図	S B 15実測図 (1 / 50)	21
第20図	S B 17実測図 (1 / 50)	折り込み
第21図	S B 19実測図 (1 / 50)	22
第22図	S B 16実測図 (1 / 50)	23
第23図	S B 18実測図 (1 / 50)	22
第24図	掘立柱建物ビット出土瓦実測図 (1 / 4)	24
第25図	掘立柱建物ビット出土土器実測図 (1 / 3)	23
第26図	井戸 S E 01実測図 (1 / 50)	25
第27図	S E 02実測図 (1 / 50)	25
第28図	S E 02・04出土土器実測図 (1 / 3)	26
第29図	S E 02出土梯実測図 (2 / 3)	27
第30図	S E 02出土貨幣 (実大)	27
第31図	S E 03実測図 (1 / 50)	28
第32図	S E 03出土土器実測図 (1 / 3)	29
第33図	S E 04実測図 (1 / 50)	30
第34図	S E 04出土磁器実測図 (1 / 3)	31
第35図	S E 04出土木製品実測図 (1 / 3)	31
第36図	S E 05実測図 (1 / 50)	32
第37図	S E 05出土土器実測図 (1 / 3)	33
第38図	S E 05出土土器実測図 (1 / 3)	34
第39図	S E 05出土遺物実測図 (1 / 3)	35
第40図	S E 05出土木製品実測図 (1 / 3)	36
第41図	S E 06実測図 (1 / 50)	36
第42図	井戸出土土錘実測図 (1 / 2)	36
第43図	土壇 S K 01出土土器実測図 (1 / 3)	37
第44図	溝 S D 出土土器実測図 (1 / 3)	40

第45図	ビット内出土土器実測図 (1/3).....	42
第46図	出土玉類実測図 (実大).....	42
第47図	ビット出土貨幣 (実大).....	43
第48図	包含層出土土器実測図 (1/3).....	44
第49図	包含層出土石器実測図 (1/3).....	45
第50図	下層出土一括土器実測図 (1/3).....	46

表 目 次

表1	ガラス小玉計測表.....	43
----	---------------	----

付 図 目 次

付図	志登遺跡群第4次調査遺構配置図 (1/100)
----	-------------------------

I 調査にいたる経過

志登遺跡群は、福岡県糸島郡前原町大字志登他に所在する埋蔵文化財包蔵地である。

本町では、昭和40年代終り頃から、農業経営の合理化・安定化を目的に、農地の基盤整備事業が実施されてきた。

志登・泊地域では、昭和53年頃にその計画が立案され、福岡県教育委員会では試掘調査を実施して遺跡の確認をおこない、農政課と協議し、埋蔵文化財の保護と泊地区県営ほ場整備事業を円滑に推めることになった。当初のほ場整備事業の範囲は埋蔵文化財の保護の点では問題はなかったが、昭和57年度からの実施範囲については一部埋蔵文化財包蔵地が削平されることになったため、前原町教育委員会では発掘調査を実施することになった。その概要は、既に報告済みである。



第1図 調査作業風景

昭和59年度実施の県営ほ場整備事業の内容は、福岡農林事務所からの届出（文化財保護法第57条の3の規定）によって明らかになり、前原町教育委員会は、同事務所と協議をおこない、事業実施によって削平される地域の発掘調査と排水溝の立ち合い調査をおこなうことになった。

今回の調査は、昭和59年7月13日から同年10月29日の間実施したが、中途での調査担当者の交替ということもあり、やや長びくことになった。

今回の調査の組織は次のとおりである。

調査主体 前原町教育委員会

総括	教育長	豊島禮藏
	社会教育課課長	中原直国
庶務	文化係係長	吉村耕治
	社会教育係係長	徳重 認
	主事	久保静代
調査	文化係主事	川村 博
	主事	林 覚
	嘱託	常松幹雄（現・福岡市教育委員会文化課職員）
	嘱託	岡部裕俊（現・前原町職員）

調査・整理補助

石井扶美子（別府大学考古学専攻卒）・中村昇平（国学院大学文学部学生）
村田文秀（別府大学文学部学生）

調査作業員

岡田りつ子・柏田睦子・原野アサ子・平山千恵子・原野スミ・東司まち子・青木輝代・
平山富士子・小柳房子・笠ふさ子・大賀ミツ子・中島和子・大賀ハツノ・藤森啓子・
藤木綾子・藤森シズエ・吉田マツエ・藤森キミエ・原野シナ・吉永峰子・橋本キヨ子・
木村シゲノ・内山澄江・中原レイ子・米山八重子・竹内孝子・藤森千代野・徳永美根子・
吉富健生・渡辺重幸・坂上清次・中田智暁

さらに、次の方々には、発掘調査開始以前から調査中におたり、ご協力をいただいた。

福岡県福岡農林事務所

所長	半田義鋪	次長	平野重利
農地整備監査課長	中村昭夫	県営第二係長	原 新吾
主任技師	加治正憲	主任技師	野美山英治
主任技師	瀬来祥市	技師	阿部 篤

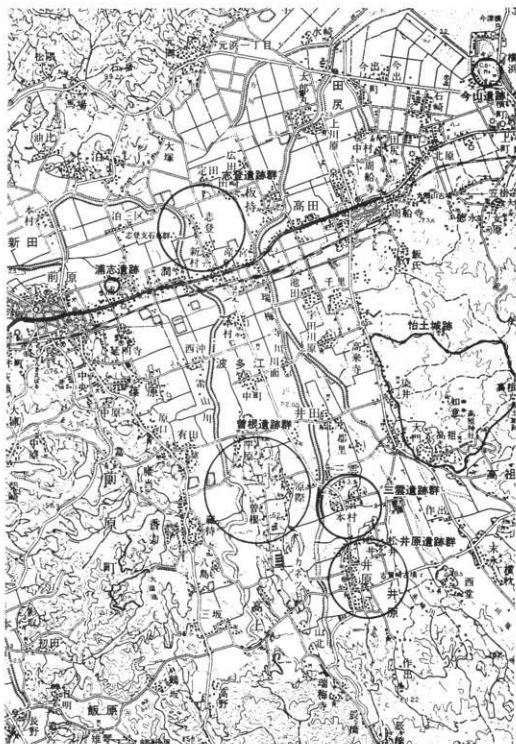
前原町土地改良区

理事長	中村敬二郎	局長	吉住 誠	主任	石垣謙心
技師	松尾正治	技師	浅田健司	技師	潤 茂和
技師	西島 優				

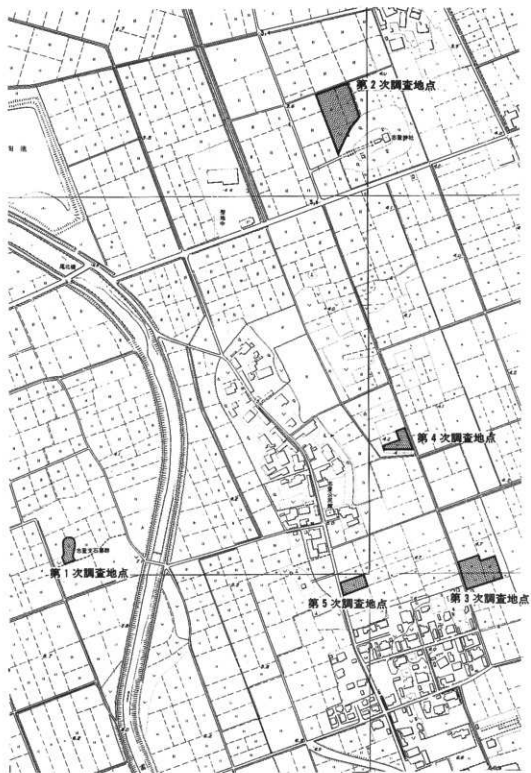
泊地区県営ほ場整備推進協議会

会長	田中國雄	副会長	宮本 薫	副会長	中村 俊
副会長	末崎 栄	会計	大庭市郎		

今回の調査において、関係諸機関ならびに地元の方々をはじめ、多くの方々のご協力を得、無事終了することができた。この場をかりて、あつくお礼申しあげる次第である。



第2図 周辺の遺跡(1/50,000)



第3図 発掘調査地点(1/5,000)

II 位置と環境

志登遺跡群は、糸島平野のほぼ中央部に位置する。遺跡群の北側は、糸島平野の中でも、標高の最も低くなる地域であり、弥生時代、今津湾と加布里湾を結んでいたと推定されている糸島水道に面していたと考えられる。また、雷山山系に源を発して北流する瑞梅寺川と雷山川はこの付近で屈曲し、それぞれ、今津湾・加布里湾に注ぐ。

糸島平野には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く分布している。

今回の調査地点から、国指定史跡である志登支石墓群は西へ約500mのところであり、小銅鐸が出土した浦志遺跡は西へ約1.4kmのところであり、さらには、太型蛤刃石斧の製造所跡である今山遺跡は東北東へ約4.5kmのところで見渡すことができる。

また、南東約3.5kmのところには、「伊都国」の中心地と考えられる三雲遺跡群・井原遺跡群、その西には曾根遺跡群が存在し、その東側の高祖山西斜面には国指定史跡である怡土城跡が存在している。

III 遺構と遺物

1. 概要

今回の発掘調査面積はおよそ500㎡で、その発掘区は、一辺約30mの正方形のうち、北西部分を一辺約20mの正方形分欠いた逆「L」字形となった。

調査の結果、竪穴式住居（SC）・掘立柱建物（SB）・井戸（SE）・土壇（SK）・溝（SD）・ピット群を検出した。

竪穴式住居は、調査区の北西側に集中する傾向があり、そのため全てが調査区外にかかってしまった。井戸は、東側で検出され、西側では検出されなかった。ピット群は北東側がその密度が高く、南側では比較的数量が少なかった。

また、調査区北側には幅約8mの溝状の削平部分が見られたが、その性格は確認できなかった。さらに、南側には粘性の強い埋土の段落ちがみられ、あるいは、溝状遺構の可能性も考えられるが、調査区内では、それを明らかにすることができなかった。

2. 竪穴式住居

調査の結果、竪穴式住居は6軒（SC01～SC06）検出したが、概要において記したとおり、調査区の北西部分に集中していたため、調査区外にかかってしまい、プランを確認できたものではなく、かろうじて、4号住居（SC04）のみが全体の4分の3程度を確認できたのみであった。

以下、順をおって説明することにする。

S C 01

遺構

一辺2.8 mの方形プランを有する住居跡であり、西側半分は調査区外にかかり不明である。床面では、壁にそって幅約10cmの周溝がめぐっている。柱穴は検出されなかった。

出土遺物

出土した遺物は、細片ばかりで、図示できるものはなかった。

S C 02

遺構

S C 01の北側の壁を切っているが、南側を土壌S K 02に、北側を土壌S K 01やピットに切られているため、全容を捉えることは不可能であり、住居跡とするにはやや無理もある。しかし、東側の壁の状況からして、一応、方形プランの住居跡としておく。

出土遺物

出土した遺物は、細片ばかりで図示できなかった。

S C 03

遺構

調査区内で確認できたのは、東側の壁の部分だけであり、住居跡として捉えるにはやや無理もあるが、一応、一辺2.8 mの方形プランの住居跡としておく。

出土遺物

出土遺物は、細片ばかりで図示できなかった。

S C 04

遺構

一辺約2.5 mの方形プランの住居跡である。一部調査区外にかかってしまったが、全体のほぼ4分の3を検出できた。ただし、西側の壁はピットによって切られており明らかではない。柱穴は、東西の主軸上に2個検出した。

出土遺物

出土遺物は、細片ばかりで図示できなかった。

S C 05

遺構

一辺約2 mの方形プランの住居跡であるが、やや不定形である。北側半分は調査区外で不明である。検出した部分のほぼ全面に焼土がみられた。

出土遺物

出土遺物は、ほとんどが細片であったが、床面から、胴部上半以上を欠く、甕形土器（第4

図2)が、角柱状の石に底部を突き破られた状態で出土した。自然石を支脚として用いていたと思われる。

甕形土器は、底部を一部欠くが、丸底で、内面はヘラケズリを施し、外面は縦方向のハケ状の工具によるナデを施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成はふつうで、色調は、外面が明褐色、内面が灰褐色を呈する。外面には、部分的にススが付着している。

SC06

遺構

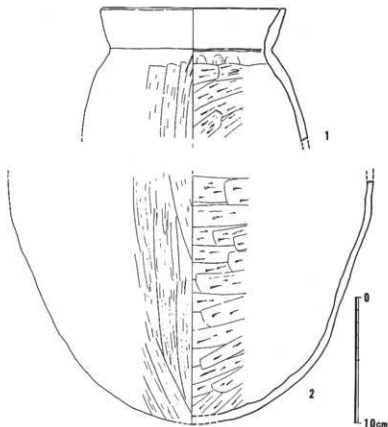
一辺約3.8mの方形プランの住居跡である

が、検出したのは、南側壁と床面の一部で、大半の部分が調査区外である。

出土遺物

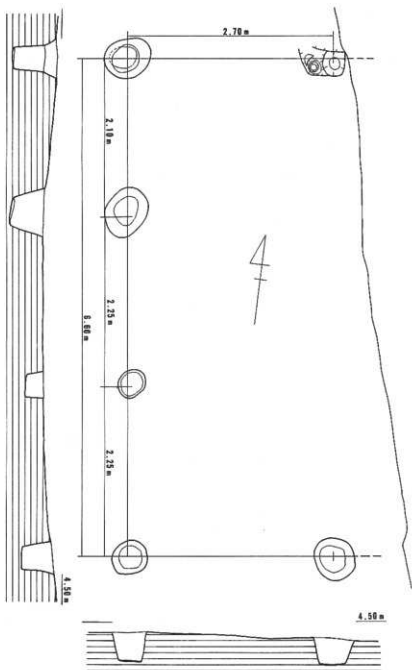
出土遺物は、ほとんどが細片であったが、床面より、胴部下半を欠く甕形土器(第4図1)が倒立した状態で出土した。

甕形土器は、肩部より上を残している。口縁部は外反ぎみにたちあがり、肩部の張りは弱い。調整は、胴部内面は縦方向のヘラケズリであるが、口縁屈曲部直下は横方向のヘラケズリである。口縁部は、内外面とも横ナデで、口縁部外面には、頸部に対する強い横ナデによる弱い稜線が生じている。外面の頸部以下は、ハケ状の工具による縦方向のナデを施している。また内面の口縁部の接合部には、浅い沈線が一周しており、整形段階で生じたものと思われる。焼成は良好で、胎土には砂粒を含み、色調は、外面がおおむね赤褐色(一部灰褐色)、内面は灰褐色を呈する。



第4図 竪穴式住居跡出土土器実測図(1/3)

1, SC06 2, SC05



第5図 掘立柱建物S B01実測図(1/50)

3. 掘立柱建物

調査の結果、掘立柱建物を19軒（SB01～SB19）検出した。しかし、概要でも記したとおり、調査区の西側を中心にピットが多数検出され、ここで記す19軒の他にも掘立柱建物が存在することも充分考えられるが、建物としてまとめ得なかった。

以下、順をおって説明していくことにする。

SB01（第5図）

遺構

3間×1間以上の規模の側柱だけの掘立柱建物である。遺構の東側部分は調査区外である。主軸方位はN7°Wに置く。柱間は主軸方向が7尺・6.5尺・6.5尺（全長20尺）で、主軸に直行する方向（以下、直行方向という）が9尺である。柱穴のひとつがSB03の柱穴を切っている。

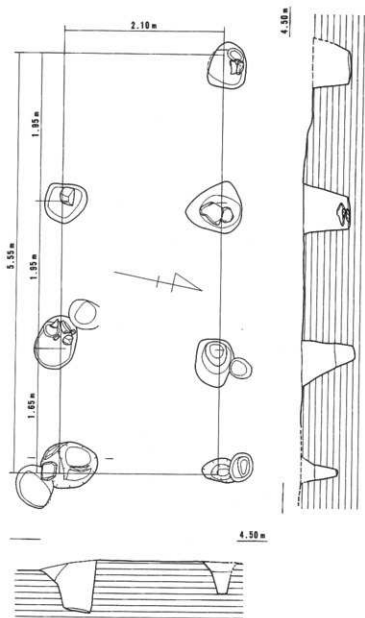
出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、糸切り底土師器片、青磁片、白磁片、滑石製石鏃片が出土した。

SB02（第6図）

遺構

3間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位はN78°30'Eに置く。柱間は、主軸方



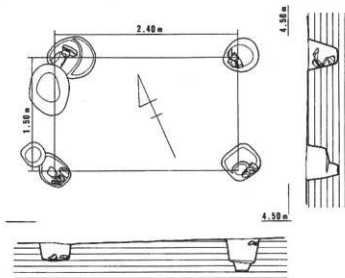
第6図 掘立柱建物SB02実測図(1/50)

向が5.5尺・6.5尺・6.5尺（全長18.5尺）で、直行方向が7尺である。南西隅の柱穴は検出できなかった。柱穴のひとつがSB06の柱穴に切られている。

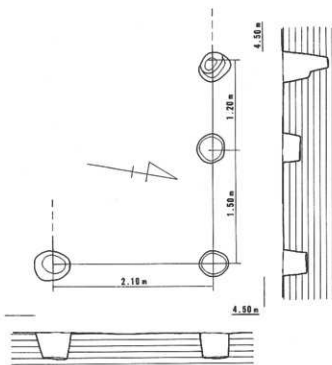
出土遺物

柱穴からは、須恵器片、土師小皿（第25図SB02-1・2）、土鍋片（同図SB02-3）、青磁片、陶器片が出土した。1は、口径8.3cm・底径6.0cm・器高1.7cmで、ヨコナデを施し、糸切り底である。2は、口径8.9cm・底径7.3cm・器高2.1cmで、ヨコナデを施し、糸切り底である。3は、内面にはハケ目調整を、口縁部内外はヨコナデを、外面はハケ目調整後にやや雑なナデを施している。焼成はやや悪く、胎土にごく少量の砂粒を含み、淡黄色を呈する。外面に煤が付着しているため、ここでは土鍋としてとり扱った。

SB03（第7図）



第7図 独立柱建物SB03実測図(1/50)



第8図 独立柱建物SB04実測図(1/50)

遺構

1間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N66°Eに置く。柱間は、主軸方向が8尺で、直行方向が5尺である。4個の柱穴すべてに、根石としたと考えられる自然石が検出された。柱穴のひとつがSB01の柱穴に切られている。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、糸切り底土師器片、陶器片が出土した。

SB04（第8図）

遺構

2間以上×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N80°Eに置く。遺構の西側は、調査区外にかかっているので、主軸方向の規模がさらに大きくなる可能性がある。また、南側の柱穴は検出できなかった。柱間は、主軸方向が3尺・4尺で、直行方向が7尺である。

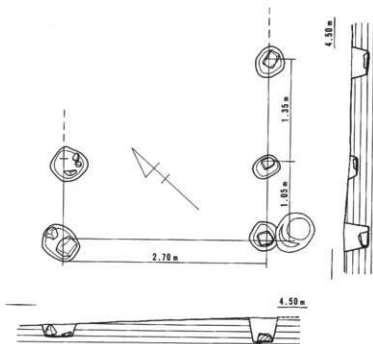
出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、土師器片が出土した。

SB05（第9図）

遺構

2間以上×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N48°Eに置く、遺構の東側は調査区外にかかっているので、主軸方向の規模がさらに大きくなる可能性がある。また、北側の柱穴は検出できなかった。柱間は、主軸方向が3.5尺・4.5尺で、直行方向が9尺である。検出した柱穴には全てに



第9図 掘立柱建物SB05実測図(1/50)

自然石が残っており、そのうち4個のものは扁平な石であり礎板にしていたと考えられる。柱穴のひとつがSB06の柱穴に切られている。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、土師器片、糸切り底土師器片が出土した。

S B 06 (第10図)

遺構

1間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N7°45'Wに置く。柱間は、主軸方向が10尺で、直行方向が6尺である。柱穴のひとつがS B 05の柱穴を切っている。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、土師器片、糸切り底土師器小皿片、青磁片、陶器片が出土した。

S B 07 (第11図)

遺構

2間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N87°30'Wに置く。柱間は、主軸方向が7尺・7尺(全長14尺)で、直行方向が7尺である。柱穴のひとつがS B 08の柱穴を切っている。

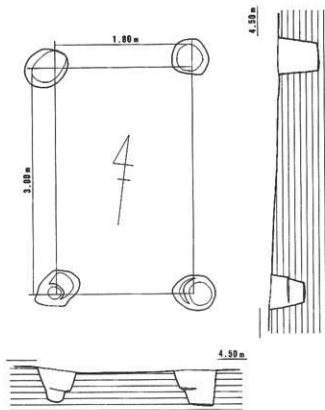
出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、須恵器片、土師器片、糸切り底土師器片、土唾、青磁片、白磁片が出土した。

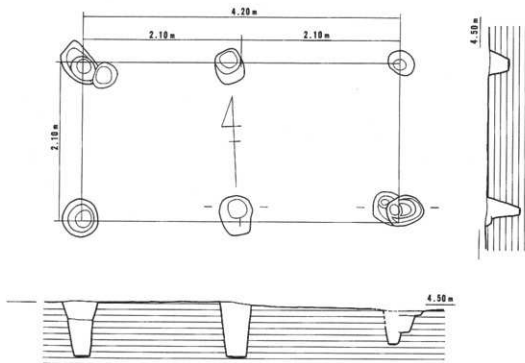
S B 08 (第12図)

遺構

3間×3間の規模の側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位は、N77°45'Eに置く。柱間は、主軸方向が4尺・4尺・4尺(全長12尺)で、直行方向が4尺・3.5尺・3.5尺である。柱穴は12個が推定されるが、3個は検出できなかった。柱穴のひとつがS B 07の柱穴に切られ、他のひとつは、S B 10の柱穴を切っている。



第10図 掘立柱建物S B 06実測図(1/50)



第11図 掘立柱建物S B07実測図(1/50)

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、ヘラ切り底土師器小皿片、糸切り底土師器小皿片、瓦器片が出土した。

S B09 (第13図)

遺構

1間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N38^{\circ}30'W$ に置く。柱間は、主軸方向が7尺で、直行方向が6尺であるが、南隅の柱穴はややずれている。4個の柱穴のうち3個には、礎板と考えられる自然石が残存していた。

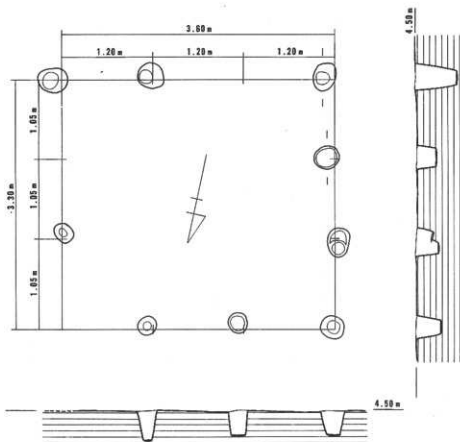
出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、土師器小皿片、内黒土器片が出土した。

S B10 (第14図)

遺構

1間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N9^{\circ}15'W$ に置く。柱間は、主軸方向、直行方向ともに10尺である。南東隅の柱穴は検出できなかった。検出した3個の柱穴には、礎板と考えられる自然石が残存していた。柱穴のひとつは、S B08の柱穴に切られている。



第12図 掘立柱建物SB08実測図(1/50)

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、土師器小皿片、青磁片が出土した。

SB11 (第15図)

遺構

2間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N3°30'Wに置く。柱間は、主軸方向が6尺・6尺(全長12尺)で、直行方向が6尺である。柱穴のひとつがSB12の柱穴に切られている。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、土師器小皿片、瓦器片、陶器片が出土した。このうち、図示した土師器小皿(第25図SB11)は、口径9.7cm・底径6.6cm・器高2.0cmで、ヨコナデを施し、糸切り底である。

SB12 (第16図)

遺構

2間×3間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N78^{\circ}30'W$ に置く。柱間は、主軸方向が8尺・8尺で、直行方向が5尺・4尺・5尺である。柱穴のひとつは、SB11の柱穴を切っている。建物は、10本の柱の側柱だけのものと考えられるが、3個の柱穴は検出できなかった。また、北西隅の柱穴は外側にややずれている。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、土師器小皿片

が出土した。このうち、図示した土師器小皿（第25図SB12）は、口径8.1cm・底径5.5cm・器高1.6cmで、ヨコナデを施し、糸切り底である。

SB13（第17図）

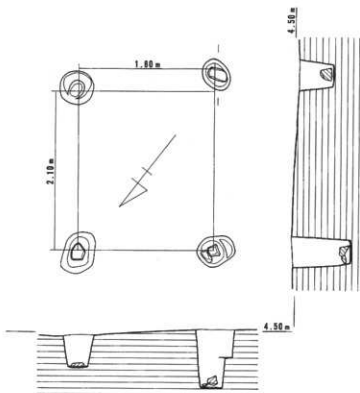
遺構

3間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N81^{\circ}30'E$ に置く。柱間は、主軸方向が4尺・4尺・4尺（全長12尺）で、直行方向は6尺である。なお、遺構の東側は調査区外であり、遺構が東側にひろがる可能性もある。また、北側の柱穴は1個しか検出できなかった。検出した柱穴のうち2個には、根石あるいは礎石と考えられる自然石が残存していた。

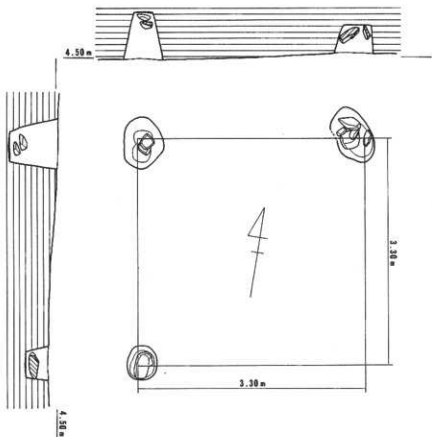
出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器小皿が出土した。このうち、2個の土師器小皿を図示した（第25図SB13-1・2）。1は、口径9.1cm・底径6.6cm・器高2.2cmで、ヨコナデを施し、底部は糸切りで板目がみられる。2は、口径9.2cm・底径6.1cm・器高2.1cmで、ヨコナデを施し、底部は糸切りで板目がみられる。

SB14（第18図）



第13図 掘立柱建物SB09実測図(1/50)



第14図 掘立柱建物SB10実測図(1/50)

遺構

2間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N44°Wに置く。柱間は、主軸方向が11尺・10尺（全長21尺）で、直行方向が9尺である。南東隅の柱穴は検出できなかった。

出土遺物

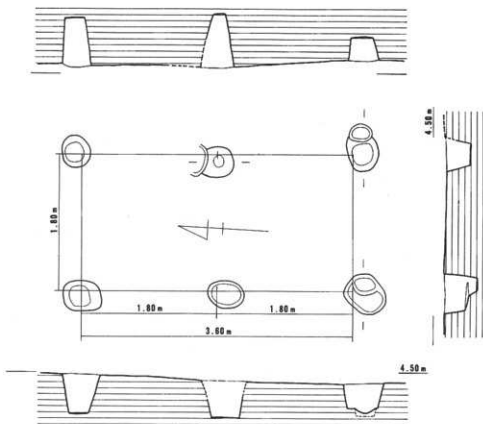
柱穴からは、土師器小皿が出土した。図示した土師器小皿（第25図SB14）は、口径6.2cm・底径4.4cm・器高1.3cmで、ヨコナデを施し、糸切り底である。

SB15（第19図）

遺構

2間×2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、N59°15'Wに置く。柱間は、主軸方向が6尺・6尺（全長12尺）で、直行方向が6尺・5尺である。南側部分の柱穴は検出できなかった。

出土遺物



第15図 掘立柱建物 S B 11実測図(1/50)

柱穴からは、土器の小片が数個出土したのみであった。

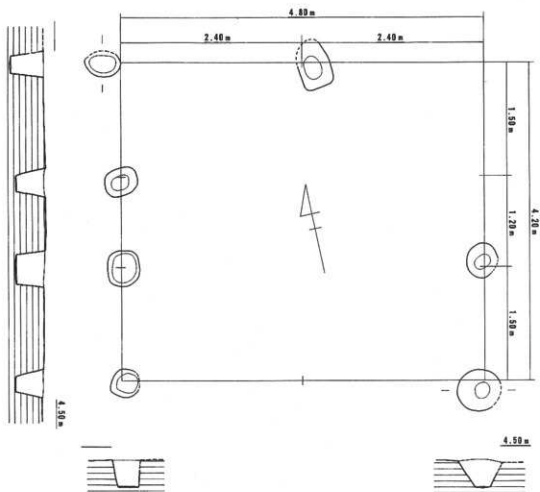
S B 16 (第22図)

遺構

3間×2間の規模の総柱の掘立柱建物である。主軸方位は、N1°45' Wに置く。柱間は、主軸方向が10尺・6尺・10尺(全長26尺)で、直行方向が13尺・8尺(全長21尺)である。遺構の北西部分は調査区外にかかっている。検出した柱穴のうち5個には、礎板と考えられる扁平な自然石が残存していた。柱穴の直径は約1 m～0.6 mと大きく、今回検出した掘立柱建物の中では最大である。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器片、糸切り底土師器片、青磁片、白磁片、瓦片、陶板片、銅滓が、そのほとんどが小片ではあるが大量に出土した。このうち瓦と陶板を図示した(第24図1・2、第25図)



第16図 掘立柱建物S B 12実測図(1/50)

1は、丸瓦の玉縁から筒部にかけての破片である。現存長17.0cm、最大幅13.0cm、玉縁部長4.5cm、器厚1.9cmを測る。筒部外面はヘラケズリの後ナデ調整を施しており、部分的にヘラケズリによる弱い稜線や砂粒の移動が残っている。玉縁部外面もヘラケズリの後ナデ調整を施している。内面は玉縁部から筒部にかけて布目痕がみられ、縁辺部はヘラによる面取り調整を施している。径1.5cmの目釘穴を穿っている。

2も丸瓦の筒部の破片である。現存長10.3cm、器厚2.5cmを測る。外面はヘラケズリの後ナデ調整を施すが、やや粗い。内面は、布目痕がみられ、縁辺部はヘラによる面取り調整を施している。径1.6cmの目釘穴を穿っている。

陶板片(第25図S B 16)は、厚さ1.3cmのもので、両面ともハケ目調整を施しており、片面

には一部にヘラナデがみられる。

SB17 (第20図)

遺構

2間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N41^{\circ}30'W$ に置く。柱間は、主軸方向が7尺・7尺(全長14尺)で、直行方向が6尺である。

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、土師器片、土師器杯、土師器小皿、白磁片が出土した。このうち、土師器の杯および小皿を図示した(第25図SB17-1~6)。2から6までが同一柱穴内の出土である。

1は、底部を欠く小皿の小片であるが、底径・傾きが確認できたので図示した。口径11.2cm・底径6.5cm・器高3.0cmを測る。ヨコナデを施し、底部は糸切りである。

2は、口径8.1cm・底径5.8cm・器高1.4cmを測り、ヨコナデを施し、底部は糸切りである。

3は、口径8.4cm・底径5.9cm・器高1.6cmを測り、ヨコナデを施し、底部は糸切りである。

4は、口径8.7cm・底径6.0cm・器高1.9cmを測り、ヨコナデを施し、底部は糸切りである。

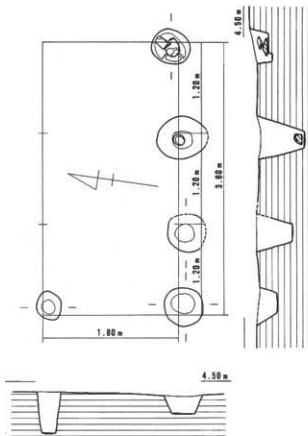
5は、口径13.1cm・底径8.0cm・器高3.2cmを測り、ヨコナデを施し、底部は糸切りである。体部がやや歪んでいる。

6は、口径12.5cm・底径7.4cm・器高3.1cmを測り、ヨコナデを施し、底部は糸切りである。

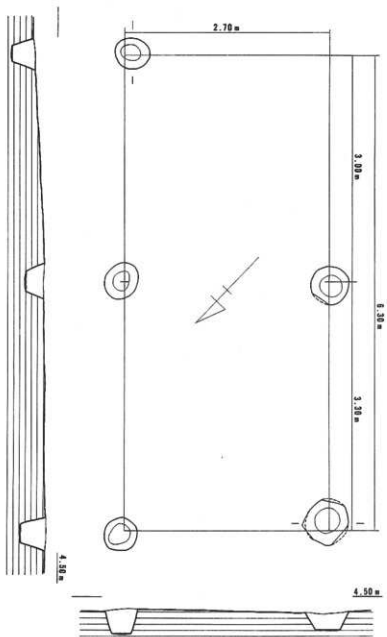
SB18 (第23図)

遺構

1間×1間の規模の掘立柱建物である。主軸は、 $N13^{\circ}15'E$ に置く。柱間は、主軸方向、直行方向ともに9尺である。4個の柱穴のうち1個に礎板と考えられる自然石が残存していた。



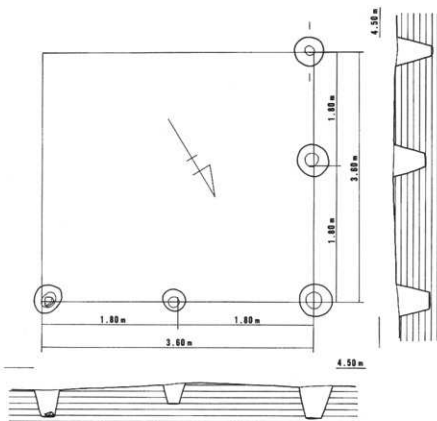
第17図 掘立柱建物SB13実測図(1/50)



第18図 掘立柱建物 S B 14 実測図 (1/50)

出土遺物

柱穴からは、弥生式土器片、古式土師器片、土師器片が出土した。



第19図 掘立柱建物 S B 15 実測図(1/50)

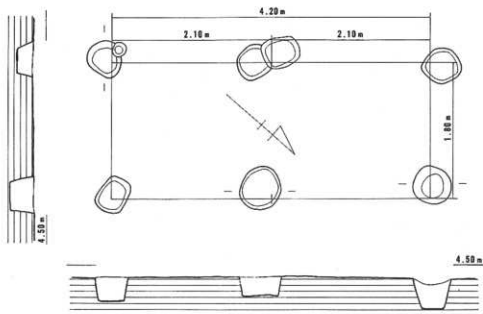
S B 19 (第21図)

遺構

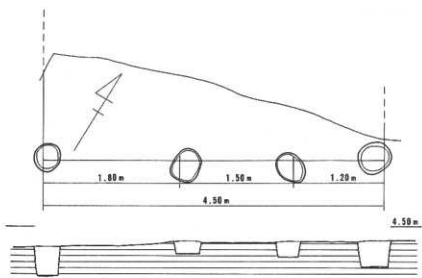
主軸方向3間の規模の掘立柱建物である。主軸方位は、 $N58^{\circ}30'E$ に置く。遺構の北側は調査区外であるため不明である。柱間は、4尺・5尺・6尺(全長15尺)である。

出土遺物

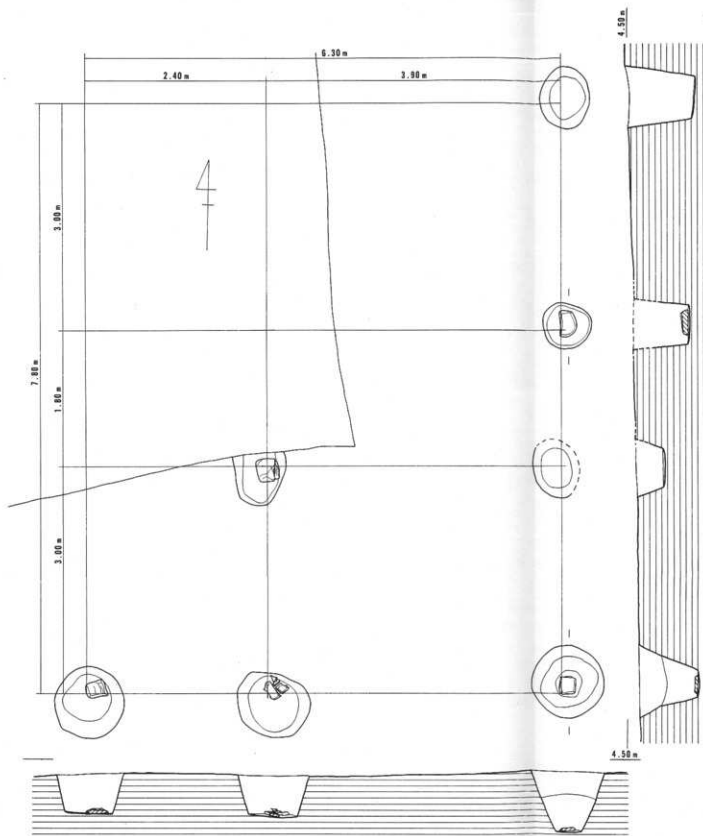
柱穴からは、弥生式土器片、土師器片が出土した。



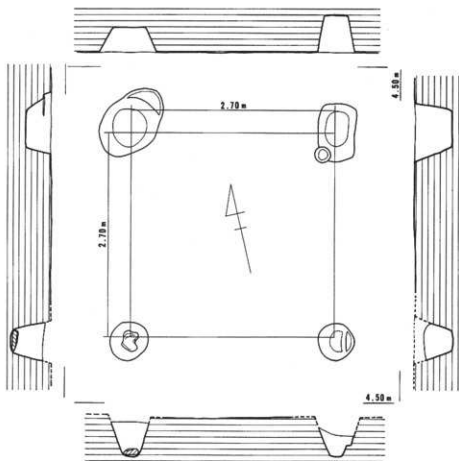
第20图 独立柱建物S B 17实测图(1/50)



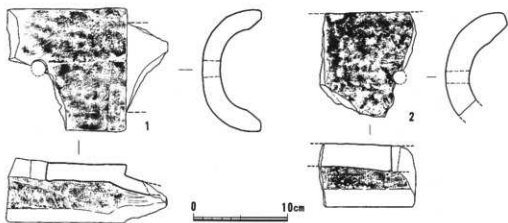
第21图 独立柱建物S B 19实测图(1/50)



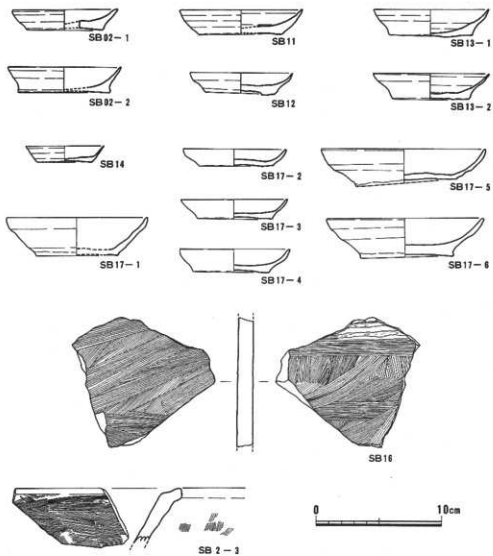
第22图 独立柱建物S B 16实例图(1/50)



第23図 掘立柱建物 S B 18 実測図 (1/50)



第24図 掘立柱建物ピット出土瓦実測図(1/4)



第25図 掘立柱建物ピット出土土器実測図(1/3)

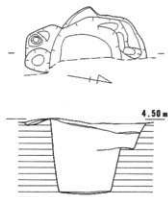
4. 井戸

井戸は6基検出した（SE01～SE06）。以下、順をおって説明することにする。

SE01

遺構（第26図）

調査区の北東隅付近で検出した。東半分が調査区外にかかっている。いくつかのビットによって切られているため、上面でのブランが乱れているが、掘り方の状況から推して、検出上面は径約1mの不整の円形であったと考えられる。検出面からの深さは約0.9mで、底面は径0.67mの不整円形で、標高3.52mである。掘り方は、下部にむかって徐々に狭くなっている。調査時に湧水をみた。



第26図 井戸SE01実測図(1/50)

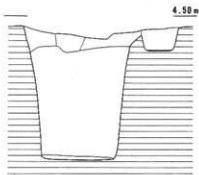
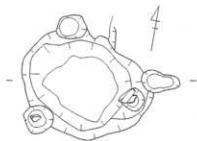
出土遺物

井戸内より、弥生式土器片、古式土師器片、瓦器片、糸切底土師器小皿片、青磁片、陶器片、土鍋片、滑石製石鍋片が山土したが、いずれも小片で図示できなかった。

SE02

遺構（第27図）

掘り方の上面ブランは、長径1.8m・短径1.35mの不整の楕円形を呈し、底面は、径0.9mの不整形を呈す。検出上面から底面までの深さは1.77mで、底面の標高は2.59mである。掘り方は、上面から底面にむかって徐々に狭くなっている。調査時に湧水をみた。



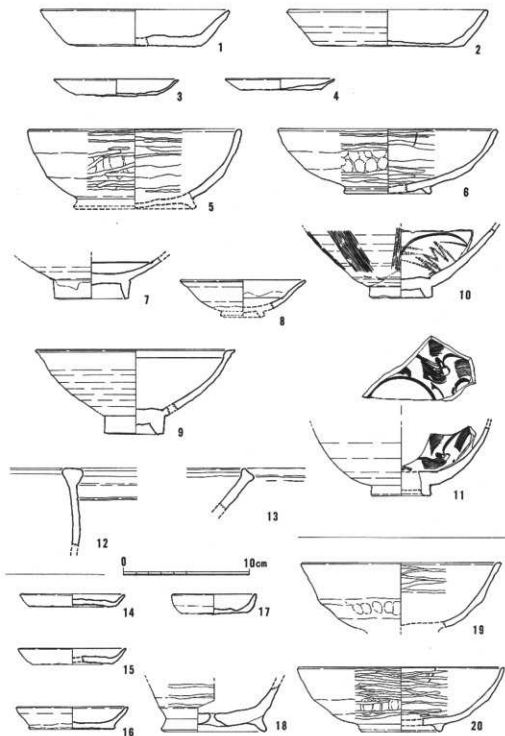
第27図 井戸SE02実測図(1/50)

出土遺物（第28図1～13、第29図、第30図、第42図1・2）

井戸内より、弥生式土器片、須恵器片、糸切り底土師器片、青磁片、白磁片、陶器片、瓦器片、土鍋片、土釜、貨幣が出土した。このうち図示できたものについて記す。

第28図1・2は、土師器杯である。

1は、口径15.0cm・底径10.4cm・器高2.9cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底である。2は、口径16.0cm・底径12.0cm・器高2.9cmを測り、ヨコナデを施し、



第28图 SE02·SE04出土土器类图(1/3)
1~13, SE02 14~20, SE04

糸切り底で板目を残す。

3・4は、土師器小皿である。

3は、口径9.9cm・底径6.5cm・器高1.4cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底に板目を残す。4は、口径8.6cm・底径6.3cm・器高0.9cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底に簾状圧痕を残す。

5・6は、瓦器の高台付椀である。

5は、内面はヨコナデの後荒いヘラミガキを施し、外面はヨコナデの後にいいなヘラミガキを施す。また、外面ヘラケズリ調整時の稜線がみられる。内面は暗灰白色、外面は黒灰色を呈する。6は、底部に板目を残し、その上から高台を付けている。内外面ともにヨコナデの後ヘラミガキを施し、外面には指頭圧痕がみられる。内面は暗灰白色、外面は灰色を呈する。

7～9は白磁片である。

7は、細くて高い高台を有し、内面見込みに沈線がめぐる。外面は高台から底部にかけて釉を施していない。8は、高台付皿の口縁部で、内面見込みに沈線がめぐる。釉は明緑灰白色を呈する。9は、高い高台を有し、内面口縁下に沈線がめぐらす。釉は暗灰白色を呈し、外面の体部下半は施釉していない。また、外面の釉には若干の貫入がみられる。

10・11は青磁片である。

10は、同安窯系のもので、外面に櫛歯による条線を描き、内面には櫛歯と沈線によって文様を描いている。釉は緑灰色を呈し、外面の高台から底部にかけては施釉していない。また、釉には気泡と貫入がみられる。11は、龍泉窯系のもので、内面に櫛歯と沈線によって文様を描いている。釉は、淡緑色を呈し、高台内に達している。

12は、陶器の口縁部片である。口縁は、断面が角円の逆三角形を呈し、外面口縁下に沈線がみられる。釉は緑褐色を呈し、口縁上面はかき取っている。胎土は赤褐色で、砂粒をやや含む。

13は、瓦質の土器の口縁部片で、片口と考えられる。焼成は良好で、胎土は砂粒を少量含む。色調は灰色を呈するが、口唇部は黒色を呈しており、重ね焼きによって生じたと考えられる。

第29図は、櫛の一部である。残存する歯部分の幅は2.2cmで、この間に26枚の歯を有する。歯部の割りつけ線とみられる沈線が刻まれている。

第30図の貨幣は、「元豊通宝」で、径2.455cm・厚さ0.175cmを測る。この貨幣の初鑄は1078年（宋・神宗）である。



第29図 S E02出土櫛実測図(2/3)



第30図 S E02出土貨幣(実大)

第41図1の土鉢は、長さ5.0cm・最大径1.1cm・孔径0.25cmを測る。焼成は良好で、胎土に砂粒をほとんど含まず、明黄褐色を呈する。2は、欠損品で、残存長2.1cm・最大径1.0cm・孔径0.35cmを測る。焼成は良好で、胎土に砂粒をほとんど含まず、赤褐色を呈する。

SE03

遺構 (第31図)

掘り方の上面プランは、長径2.56m・短径2.13mの不整の楕円形を呈し、底面は、一辺0.45mのほぼ方形を呈す。検出上面から底面までの深さは2.04mで、底面の標高は2.31mである。掘り方は、上面から約0.8mのところに段がついており、上面からその段までは平面プランはほぼ円形を呈すが、以下は方形にちかい。調査時に湧水を見た。

出土遺物 (第32図)

井戸内より、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器片、瓦器片、土鍋片、青磁片、白磁片が出土した。このうち図示できたものについて記す。

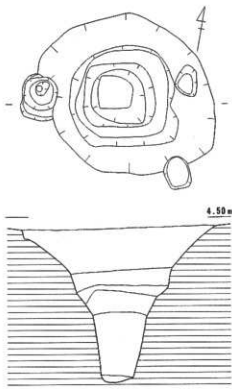
1は土師器杯である。口径13.4cm・底径9.1cm・器高2.4cmを測り、やや強いヨコナデが施され、底部は糸切り底で板目を残す。

2は内黒土器である。口径13.8cm・高台径7.1cm・器高5.1cmを測る。内外面とも、ヨコナデの後横方向のヘラミガキを施しているが、器表剥落のため不明である。胎土は精製され、焼成は良好で、内面黒色・外面淡赤褐色を呈する。

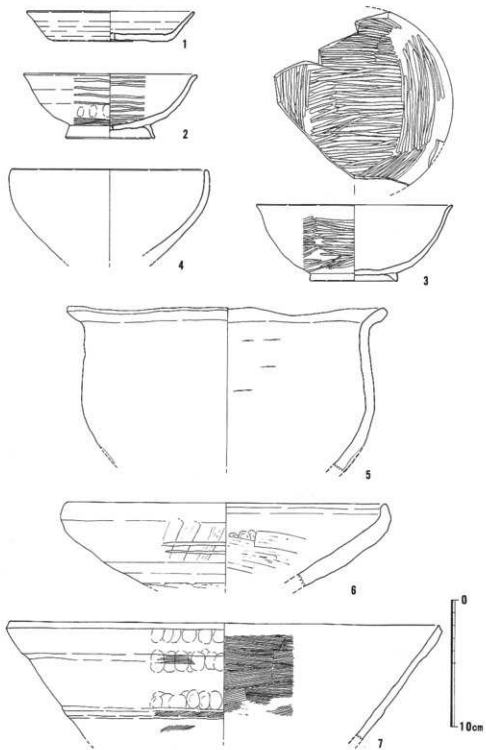
3は黒色土器である。口径15.7cm・高台径7.0cm・器高6.1cmを測る。外面は、横方向のヘラミガキを丁寧に施し、高台内にも施す。内面も丁寧なヘラミガキを施しており、見込み方は方向をほとんど乱さず一定方向を守り、体部は横方向で、見込み部は一見方形に区切ったようにみえる。胎土は精製され、焼成は良好である。

4は高麗青磁の口縁部片である。内外面とも、白色粘土の象眼によって、口縁部付近は10条を一単位とする斜線を交互に描き、体部は梅花文様でうずめ、内面見込みに蓮弁文を描いてそれぞれの文様帯を一条ないし二条の線によって区切っている。色調は淡緑灰色を呈し、釉には貫入がみられる。また内面には軸の斑がみられる。

5は土鍋である。内外面ともヨコナデを施し、外反する口縁の上端は波うっている。胎土は、



第31図 井戸SE03実測図(1/50)



第32圖 S E 03出土土器実測圖(1/3)

砂粒を含み、焼成はやや甘い。色調は暗灰色を呈し、外面には煤が付着している。

6は鉢形の土師器の口縁部である。内面はヘラケズリの後ヨコナデを施し、外面はヘラケズリの後、口縁部はヨコナデ、体部上半は縦方向の強いナデを施し、体部下半はヘラケズリのみである。胎土は砂粒をやや含み、焼成は良好である。

7は捏鉢の口縁部片である。口縁部を肥厚させ平端部は若干くぼんでいる。体部外面に小さな凸帯をめぐらしている。内外面ともハケ目調整の後ナデを施しているが、内面のナデは弱くヨコハケをやや明瞭に残す。また、凸帯部には明瞭にハケ目を残している。胎土の砂粒は少なく、焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈し、外面には煤が付着している。

SE04

遺構 (第33図)

掘り方の上面プランは、径2.1mの不整の円形を呈し、底面は一辺0.35mの隅丸方形を呈す。検出上面から底面までの深さは1.05mで、底面の標高は3.29mである。掘り方は、上面から底面に向かって徐々に狭くなるが、上面から0.5mのところやや屈曲しており、そこまではほぼ円形の平面プランを呈すが、それより下部は方形のプランを呈す。調査時には、湧水はみられなかった。

出土遺物 (第28図14~20・第34図・第35図・第42図3・第46図1)

井戸内からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器片、青磁片が出土した。このうち図示できたものについて記す。

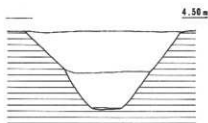
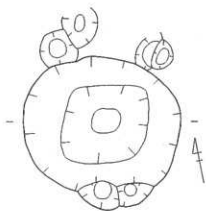
第28図14~17は土師器小皿である。

14は、口径8.3cm・底径6.9cm・器高1.1cmを測る。ヨコナデを施し、糸切り底で板目を残す。

15は、口径8.5cm・底径6.2cm・器高1.3cmを測る。ヨコナデを施し、糸切り底である。16は、口径8.8cm・底径6.8cm・器高1.8cmを測る。ヨコナデを施し、糸切り底である。内面見込みには、ヘラ状工具の先端で施した文様らしきものがある。17は、口径6.7cm・底径5.2cm・器高1.6cmを測る。ヨコナデを施し、糸切り底で板目を残す。

18は、土師質の土師の底部である。高台径は8.4cmを測る。ナデを施し、外面にはヘラミガキがみられる。底部の中央付近には焼成後の穿孔がみられる。

19は土師器碗で、口径15.9cmを測る。内面はナデの後ヘラミガキを施し、外面はヘラケズリ



第33図 井戸SE04実測図(1/50)

の後ナデており、指頭圧痕を残す。

20は土師器高台付椀で、口径16.4cm・高台径6.4cm・器高5.1cmを測る。内面はナデの後ヘラミガキを施し、外面はヘラケズリの後ナデ、さらにヘラミガキを施し指頭圧痕を残す。

第34図1～3は、越州窯系青磁片である。

1は、高台付椀である。見込みに重ね焼きの目跡が残り、高台部にも目跡が残り、疊付部の軸は削り取られている。外面には縦方向に沈線状のくぼみがみられる。色調は深いオリーブ色を呈する。

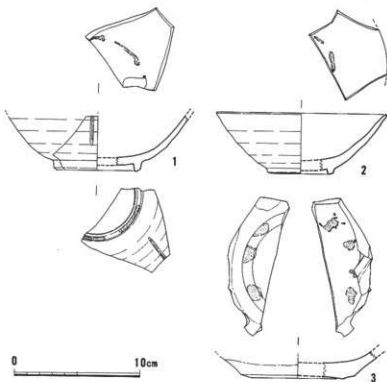
2は、高台付椀である。見込みに重ね焼きの目跡が残り、高台部は疊

付部の軸が削り取られているが、高台側面で目跡を確認することができる。色調は緑がかった灰色を呈する。胎土は精製され灰白色を呈する。

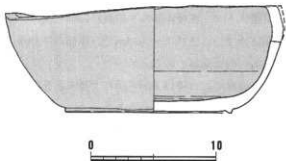
3は、椀の底部片である。見込みと疊付部には、重ね焼きの目跡がみられる。軸は緑がかった灰色を呈し、底部には軸を施していない。胎土は精製され灰白色を呈する。

第42図3の土鍾は、長さ4.2cm・最大径0.9cm・孔径0.3cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、明黄褐色を呈する。

第35図は、上からみると長楕円形を呈する木製品で、長径22.0cm・短



第34図 S E 04出土磁器実測図(1/3)



第35図 S E 04出土木製品(1/3)

径15.5cm・器高8.4cmを測る。半採木を横木取りで加工しており、木心が長軸方向の両端に残る。外底部には低い高台を削り出しており、内面には成形加工痕が明瞭に残る。内・外面とも黒漆を塗布している。

第46図1はガラス製小玉で、特徴は表1のとおりである。

SE05

遺構 (第36図)

掘り方の上面プランは、径2.20mの不整の円形を呈する。掘り方は2段掘りで、検出上面から深さ約1.1mのところに段が付き、底面は径0.77mのほぼ円形を呈する。検出上面から底面までの深さは2.05mを測り、底面の標高は2.22mである。調査時に湧水をみた。

出土遺物 (第37～40図)

井戸内からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器(小皿・杯・丸底杯他)、瓦器、白磁片、石鍋片、木製品が出土した。

1～46・48～56は土師器である。

1は、口径9.4cm・底径7.0cm・器高0.9cmを測り、外底部はヘラ切りで板目を残し、黄灰色を呈する。2～31はヘラ切り底に板目を残す小皿で、口径8.3～9.7cmを測り、灰白・

黄白色を呈する。32～38は糸切り底に板目を残す小皿で、口径8.4～9.5cmを測り、灰白・黄灰色を呈する。39～46は丸底杯で、口径14.2～15.8cmを測り、42はコテ状工具の痕跡を残し、灰白・茶灰色を呈する。48～51は杯で、口径14.8～15.6cm・底径6.6～6.9cm・器高3.4～3.8cmを測り、体部はヨコナデで、外底部は糸切りであり、灰白色・茶灰色を呈す。52は小皿で、口径9.4cm・底径4.5cm・器高1.75cmを測り、体部はヨコナデで、外底部は糸切りである。53～56は椀で、口径14.5～16.2cmで、体部内・外面にヘラミガキを施す。

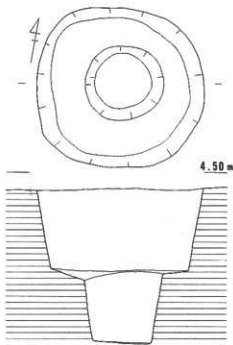
47・60～63は瓦器である。

47は丸底杯で、口径15.0cmを測り、黒灰色を呈する。60～62は椀で、口径16.3～16.9cmを測り、体部内外面にヘラミガキをみる。

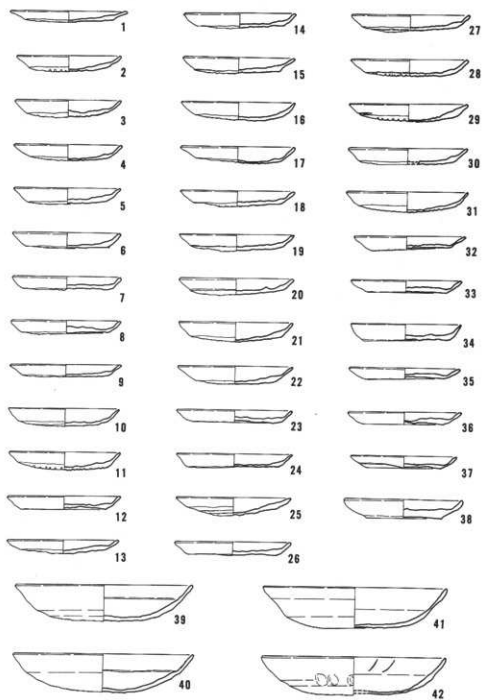
57～59は白磁で、57・59は椀であり、58は高台付小皿であろう。

64は石鍋で、外面はケズリ成形、内面にはこげつきの炭化物をみる。

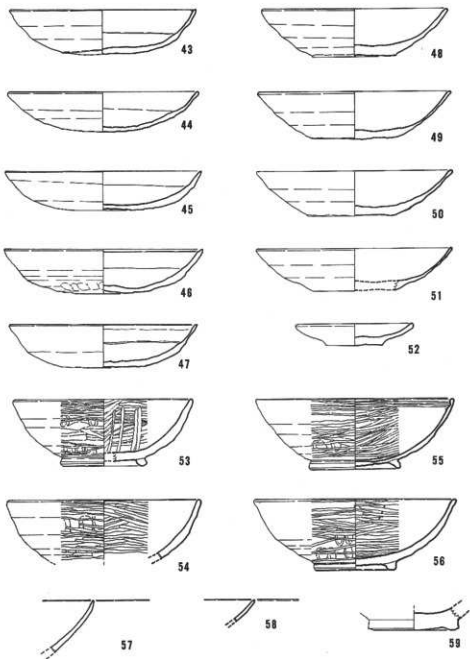
第40図1～5は木製品である。



第36図 井戸SE05実測図(1/50)



第37图 SE05出土土器实测图(1/3)



第38图 SE05出土土器实测图(1/3)

1は紡錘車であろうか。厚さ0.6cm程の板材を加工した径10.0cmの円形板で、中心に径1.4cmの孔を穿っている。他の板材からの転用と考えられ、板面に墨線が三条ひかれている。縁辺部に2個の小孔が並んで穿たれている。

2～5はいずれも片材である。

2は、厚さ0.7cmで、上端部は平坦に下端部は台形状に加工されているが、両側縁とも欠失している。

3は、下端を枕状に加工しており、側縁部は丁寧に面取りを施している。心持ち材である。

4は、建築材の一部であろうか。板目取りの板材の一端に断面長方形の突出帯を削り出している。破損面には焼痕が残る。

5は、曲物の側板片であろうか。板目に沿って等間隔に筋目が切り込まれ、一部斜線も加わり、斜格子状の筋目となっている。

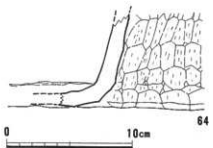
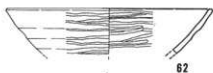
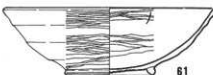
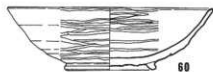
SE06

遺構 (第41図)

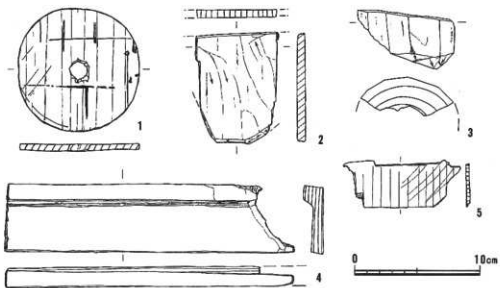
掘り方の上面プランは、径0.4mの不整の円形を呈する。底面は0.31mの不整の円形を呈し、上面から底面までの深さは0.39mで、底面の標高は3.88mである。この井戸は、径1.84mの円形の遺構(南側は調査区外)の中にあり、この円形遺構と井戸の関係は確認できなかったが、いっしょに図示した。調査時に、湧水をわずかにみた。

出土遺物

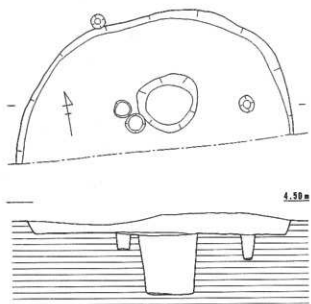
弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、土師器片が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。



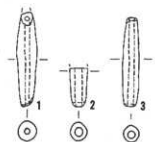
第39図 SE05出土遺物実測図(1/3)



第40图 SE05出土木製品実測図(1/3)



第41图 井戸SE06実測図(1/50)



第42图 井戸出土土錘 実測図(1/2)

1・2、SE02出土
3、SE04出土

5. 土 塚

土塚は、大小17個（S K01～S K17）を検出した。以下、順を追って記すが、出土した遺物はほとんどが細片で、S K01出土の遺物の一部を図示するに止まった。

S K01

遺 構

西側部分は調査区外にかかっている。規模は、長さ1.9m・幅1.5 + α m・深さ0.44mを測る。掘り方の平面プランは不整の楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。

出土遺物（第43図）

弥生式土器、土師器、青磁、白磁、瓦質土器などが出土した。

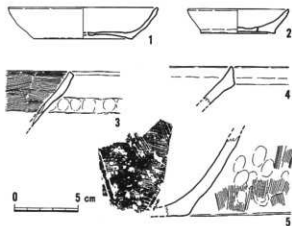
1は、土師器小皿で、口径12.0cm・底径7.8cm・器高2.5cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底である。

2も土師器小皿で、口径8.1cm・底径5.9cm・器高2.0cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底である。

3は土師器の土器の口縁部で、捏鉢と考えられる。内面は横方向のハケ目がみられ、外面はナデしており、肥厚する口縁の下に指頭圧痕を残す。外面には、口縁部を除いて、煤が付着している。

4は、瓦質土器の口縁部で、灰色を呈すが、口縁外面は黒灰色を呈する。

5は、瓦質の摺鉢で、内面はヨコハケの中にところどころ斜方向のハケ目がみられ、その後に沈線をつけている。外面はハケ目調整の後ナデている。



第43図 土塚S K01出土土器実測図(1/3)

S K02

遺 構

西側部分は調査区外にかかっている。規模は、長さ1.37m・幅0.75 + α m・深さ0.32mを測る。掘り方の平面プランは不整形で、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

糸切り底土師器、青磁、白磁、青白磁が出土した。

S K03

遺 構

長さ2.1m・幅0.8m・深さ0.15mを測る。掘り方の平面プランは長方形を呈する。

出土遺物

弥生式土器、土師器が出土した。

S K 04

遺 構

長さ $0.8 + \alpha$ m・幅 $0.5 + \alpha$ m・深さ 0.12 mを測る。他の遺構に切られて、プランは明確ではないが、ほぼ長方形であったと考えられる。

出土遺物

弥生式土器、土師器、陶器が出土した。

S K 05

遺 構

東側部分は調査区外にかかっている。長さ 0.9 m・幅 $0.8 + \alpha$ m・深さ 0.43 mを測る。掘り方の平面プランはほぼ円形で、土壌内に径 15 cm前後の自然石がみられる。

出土遺物

糸切り底の土師器が出土した。

S K 06

遺 構

長さ 0.85 m・幅 0.5 m・深さ 0.54 mを測る。掘り方の平面プランは長方形に近い形状を呈す。

出土遺物

弥生式土器、須恵器、土師器、青磁、白磁、瓦器、土鍋、石鍋が出土した。

S K 07

遺 構

長さ $0.6 + \alpha$ m・幅 0.65 m・深さ 0.12 mを測る。掘り方の平面プランは不整の楕円形を呈する。

出土遺物

弥生式土器、須恵器、古式土師器、土師器が出土した。

S K 08

遺 構

長さ 0.9 m・幅 1.05 m・深さ 0.67 mを測る。掘り方の平面プランは、不整の楕円形を呈する。

出土遺物

糸切り底の土師器、摺鉢、片口土器、青磁、白磁が出土した。

S K 09

遺 構

長さ 1.75 m・幅 1.1 m・深さ 0.91 mを測る。掘り方の平面プランは、不整の楕円形を呈し、

底面はほぼ平坦である。

出土遺物

ヘラ切り底土師器、糸切り底土師器、白磁が出土した。

S K 10

遺構

長さ2.25m・幅1.65m・深さ0.30mを測る。掘り方の平面プランは隅丸方形を呈し、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

瓦器、土師器、青磁が出土した。

S K 11

遺構

長さ3.2m・幅1.9m・深さ0.46mを測る。掘り方の平面プランは楕円形で、土壌内西側の深さ0.24mのところに幅0.4mの段を有する。

出土遺物

土師器、須恵器、青磁が出土した。

S K 12

遺構

長さ2.85m・幅1.85m・深さ0.53mを測る。掘り方の平面プランは、ほぼ楕円形を呈する。

出土遺物

弥生式土器、須恵器が出土した。

S K 13

遺構

長さ1.6m・幅0.9m・深さ0.1mを測る。掘り方の平面プランは、長方形を呈する。

出土遺物

須恵器、白磁が出土した。

S K 14

遺構

長さ2.65m・幅1.15m・深さ0.13mを測る。掘り方の平面プランは、ほぼ長方形を呈する。

出土遺物

土師器、陶器が出土した。

S K 15

遺構

長さ1.65m・幅1.2m・深さ0.07mを測る。掘り方の平面プランは、不整の方形を呈する。

出土遺物

古式土師器、須恵器、糸切り底土師器、土鍋、陶器が出土した。

SK16

遺構

長さ1.1m・幅0.8m・深さ0.07mを測る。掘り方の平面プランは、不整の方形を呈する。

出土遺物

須恵器、土師器、青磁、白磁、瓦器が出土した。

SK17

遺構

長さ $2.25 + \alpha$ m・幅0.75m・深さ0.23mを測る。掘り方の平面プランは、不整の長方形を呈する。

出土遺物

土師器、瓦器、陶器が出土した。

6. 溝状遺構

遺構

溝状遺構は、全部で7条検出した(SD01～SD07)。

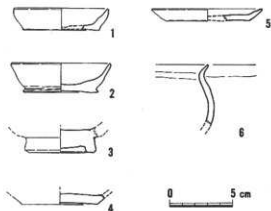
SD01は、調査区北側で検出した。長さ9.5m・幅0.7m・深さ約0.2mを測る。SD02～06は小規模のもので、長さ3.5～1.2m・幅0.5～0.2m・深さ0.15～0.10mを測る。SD07は、調査区西側で検出し、長さ7.0m・幅0.5m・深さ0.15mを測る。

出土遺物

ほとんどの遺物は小片であり、図示できたのは、SD01と03の出土品の一部である。

(第44図)

SD01からは、糸切り底土師器、青磁、白磁、高麗青磁、片口、土鍋、陶器が出土した。SD02からは、土師器が出土した。SD03からは、古式土師器、糸切り底土師器が出土した。SD04からは、土師器が出土した。SD05からは、土師器が出土した。SD06からは、弥生式土器、古式土師器が出土した。SD07からは、弥生式土器、須



第44図 溝SD出土土器実測図(1/3)
1～4、SD01 5・6、SD03

恵器、土師器が出土した。

第44図1・2・5は土師器小皿である。1は、口径7.5cm・底径6.0cm・器高1.8cmを測り、糸切り底である。2は、口径7.8cm・底径5.9cm・器高2.3cmを測り、糸切り底に板目を残す。5は、口径8.7cm・底径6.7cm・器高1.0cmを測り、糸切り底である。

3は、青磁の高台部で、高台内は平坦で、高台径5.6cmを測る。釉は、緑灰色で、高台内と床付部は釉がかき取られているが、床付部の釉の残存部に、焼台痕を残している。胎土は精製され、灰白色を呈する。

4は、白磁の底部である。釉は、明灰色で、底部外面全体に施される。内面見込みには沈線がめぐる。胎土は精製され、白色を呈する。

6は、土師器の小型の壺の口縁部である。内外面ともナデ調整を施す。胎土に砂粒を含み、焼成はふつうである。

7. ヒット内の出土遺物

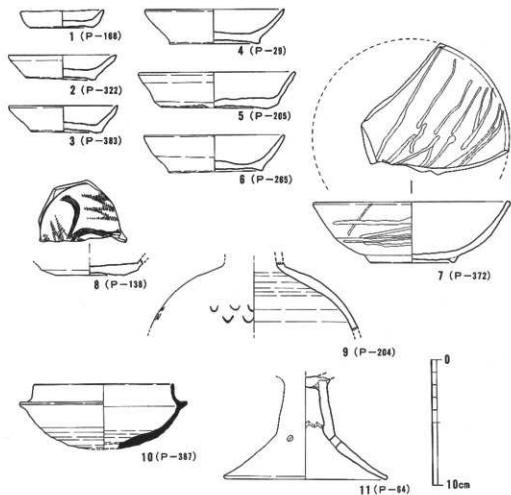
第45図1～3は、土師器小皿である。1は、口径6.5cm・底径4.9cm・器高1.4cmを測り、糸切り底で、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。2は、口径8.5cm・底径5.4cm・器高1.9cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底で、胎土は砂粒をやや含み、焼成はやや悪い。3は、口径8.6cm・底径5.6cm・器高2.1cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底で、胎土には砂粒をやや含み、焼成はふつうである。

4～6は、土師器杯である。4は、口径11.0cm・底径7.1cm・器高2.7cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底で、胎土にやや砂粒を含み、焼成はふつうである。5は、口径12.4cm・底径8.2cm・器高2.8cmを測り、ヘラケズリの後ヨコナデを施し、糸切り底で、胎には砂粒をあまり含まず、焼成は良好である。6は、口径11.1cm・底径7.4cm・器高2.9cmを測り、ヨコナデを施し、糸切り底で、胎土に砂粒はあまり含まないが径3～4mmの小石が混ざり、焼成はふつうである。

7は、瓦器の高台付椀である。口径15.5cm・高台径6.7cm・器高4.8cmを測る。底部は、ヘラ切りで、板目を残し、断面三角形の小さな高台をつける。内面には縦方向に荒いヘラミガキを施し、外面は横方向にこれも荒いヘラミガキを施す。色調は、暗黒灰色を呈する。

8は、同安楽系の青磁皿である。見込みに櫛歯とヘラによる文様が描かれている。釉は淡緑灰色を呈し、底部はかきとられており、胎土は灰白色を呈する。

9は、高麗青磁の瓶の肩部である。黒色粘土の象眼によって連続しない波状文を描いている。釉は深緑灰色を呈し貫入をみる。内面にはロクロによる成形痕が明瞭にみられ、胎土は暗灰白色を呈する。



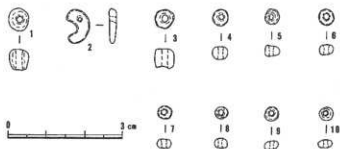
第45図 ビット内出土土器実測図(1/3)

10は、須恵器杯身で、外底部にヘラケズリを施している。胎土には砂粒を含み、焼成はやや悪い。

11は、土師器高杯の脚部で、大きく広がる裾の屈曲部に穿孔をみる。器表が剥落しており、調整痕は不明瞭である。

内面には接合痕が明瞭に残る。

第46図2は、石製勾玉であ



第46図 出土玉類実測図(実大) 1、SE04 2-10、P-41

る。長さ9.05mm・厚さ2.20mm・孔径1.35mmを測る。茶褐色を呈し、半透明の石材を用いている。3～10はガラス製小玉で特徴は表1のとおりである。

第47図の貨幣は、「祥符元宝」で、径2.545cm・厚さ0.140cmを測る。この貨幣の初鑄は、1008年（宋・真宗）である。

8. 包含層の出土遺物

第48図1～3・12は、須恵器である。1は、杯蓋で、天井部にヘラケズリを施すが雑である。2は、杯身で、底部外面にヘラケズリを施す。3は、匙で、沈線の間にヘラ状工具による刺突文を施す。12は、内外面にタタキ目を有する。

4・5は土師器である。4は、杯の口縁部片で、内外面ともナデを施し丹を塗付しており、胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。5は、脚部片で、外面はヘラミガキを施し、内面はハケ目調整を施す。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。

6は、白磁で、内面見込みに環状の釉のかき取りがみられ、釉は緑がかった灰白色を呈する。

7は、龍泉窯系の青磁で、細い高台がつき、外面に蓮弁がつくられ、釉は厚く緑灰色を呈する。

8・9は、陶器である。8は、外面を研磨の後菱形の印刻を施し、内面には平行タタキ痕を残す。9は、断面三角形の口縁部の上面と両端は面とりされ、外面には研磨の後口縁直下に方形の印刻を連続させている。

10・11は、瓦質の摺鉢である。10は、口径31.1cm・底径13.5cm・器高8.3cmを測り、口縁部は粘土を貼りつけて内側に肥厚させている。外面は口縁部はヨコナデ体部はナデで、内面はハケ目調整の後8条を一単位とする沈線を施しており、底部外面には簾状圧痕を残す。11は、口縁はやや肥厚し、外面はナデ調整で指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデを施し、内面はハケ目調整の後条線を施している。

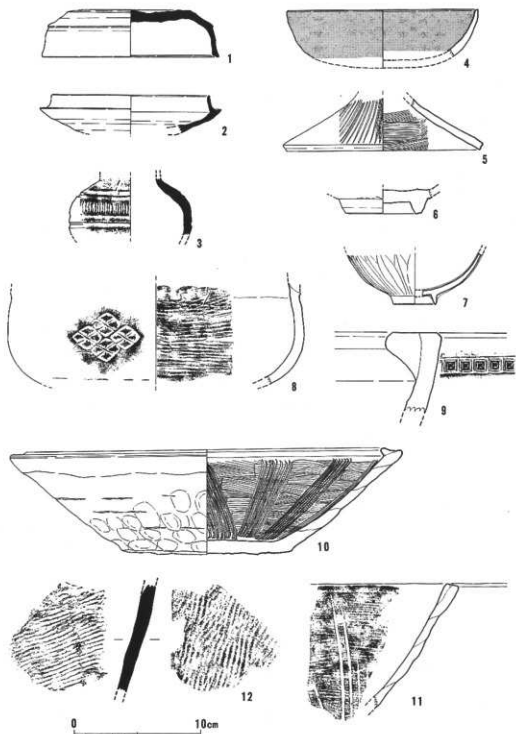
第49図1は、滑石製石鐮で、長さ11.0cm・幅3.3cm・厚さ2.4cmを測り、十字に溝がめぐっており、縦方向のそのほうが深い。2は、滑石製石鍋の2次加工品で、鈎部を研磨して楕円形につくっており、短辺の一方に溝を切り込んでいる。

表1 ガラス小玉計測表 (単位mm)

No	径	厚	孔径	色
1	5.70	5.20	2.95	コバルトブルー
3	4.30	4.95	1.70	コバルトブルー
4	4.95 4.20	3.15	1.60	スカイブルー
5	4.15	3.50	1.30	スカイブルー
6	4.00	2.25	1.55	スカイブルー
7	3.85	2.40	1.25	コバルトブルー
8	3.45 3.10	2.15	1.30	コバルトブルー
9	3.50	2.10	1.45	コバルトブルー
10	3.95	1.95	1.20	コバルトブルー



第47図 ヒット内出土貨幣(実大)



第48圖 包含層出土土器実測圖(1/3)

9. 下層出土の一括遺物

遺構としての確認はできなかったが、一括資料として得られた古式土師器を第50図に示した。

1は、わずかに内湾しながら立ち上がる口縁を有する甕で、口縁部内外面はヨコナデを施し、口縁端はわずかにくぼむ。口縁部つけ根から肩部の内面は横方向のヘラケズリを施し、それ以下は斜上方へのヘラケズリとなる。外面は、頸部から肩部にかけてヨコハケで、それより下は、主にタテハケとなるが、部分的にヨコハケもみられる。また、タタキ痕も所々に残る。肩部には、ヘラ状工具の先端による、波状文と列点文がみられる。

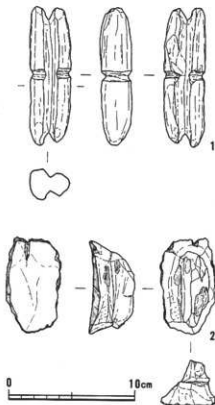
2も、やや内湾ぎみに立ち上がる口縁を有する甕である。内面は、口縁部下は横方向へのヘラケズリで、それより下は、縦方向のヘラケズリである。口縁は内外面ともヨコナデを施し、先端部は若干くぼみ、外面には指頭圧痕を残す。外面は、頸部から胴部最大径部にかけてはヨコハケを施し、それより下はタテハケとなる。

3は、小型丸底甕で、頸部以下の内面はヘラケズリを施し、口縁部は内外面ともにヨコナデで、外面はハケ目調整を施す。外面全体と口縁部内面に、丹を塗付している。

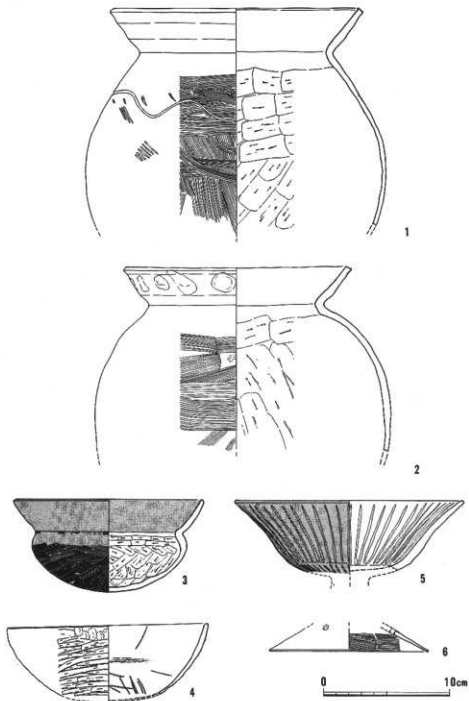
4は、鉢で、内面はナデているが、部分的に工具の条痕がみられ、外面は粗いヘラケズリを施している。

5は、高杯の杯部で、内外面ともに、ナデの後ヘラミガキを施している。外面に丹を塗付している。

6は、高杯の脚部で、外面はナデ調整で、内面はヨコハケで、穿孔がみられる。



第49図 包含層出土石器実測図(1/3)



第50图 下层出土土器实测图(1/3)

10. むすび

今回の調査では、古墳時代から中世にかけての遺構を検出したが、このうち、竪穴式住居、掘立柱建物、井戸についてまとめて、むすびとしたい。

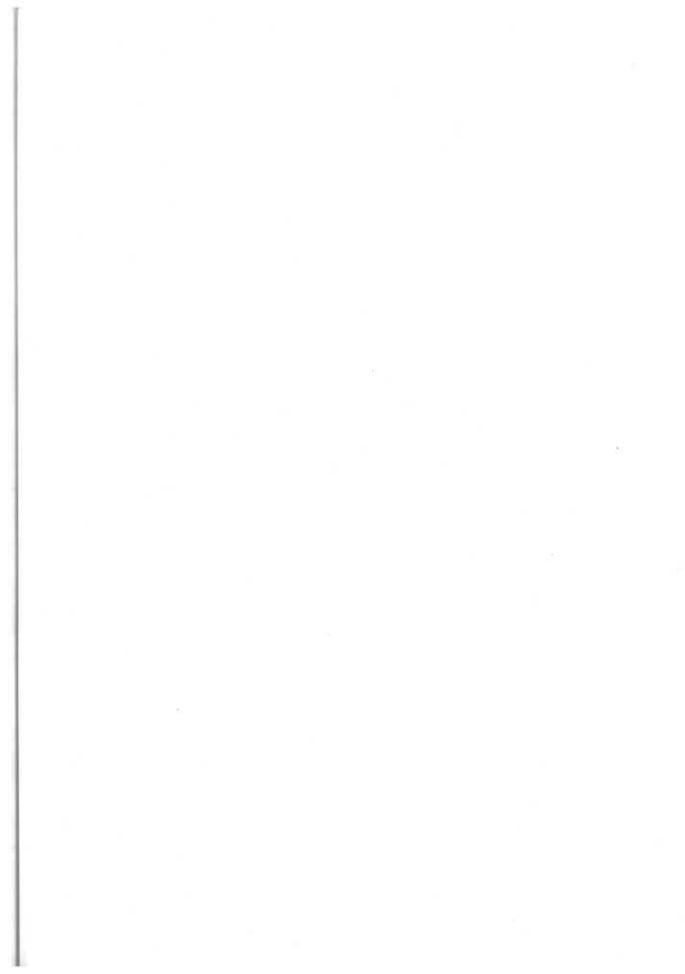
まず竪穴式住居については、既述のとおり、プランを完全に確認できたものが一軒もないという不十分なかたちになってしまった。また、必然的に、それぞれの時期決定をし得る資料も乏しく、かろうじて、SC05・06において床面から土器を検出できただけであった。この資料から、SC05・06については、古墳時代前期後半ぐらいのものであると考えられる。他については、時期決定は困難である。

さらに、竪穴式住居は、調査区北西側に偏って検出したことは既述のとおりであるが、これは、住居が集中していたということよりも、後世の建物等の建築の結果、削平されたと考えるべきであろう。

次に、掘立柱建物については、多くのピット群の中から図上復元という形をとったため、ピット群の存在からも、完全に検出できたとは言えない。しかし、この中で主軸方向をみると、ほぼ南北に置くもの(SB01、06、08、10、11、16、18)、ほぼ東西に置くもの(02、04、07、12、13)、約45°振っているもの(03、05、09、14、15、17、19)の3群に大きく分けることができ、一時期の建物群の方向がほぼ同一であるということが許されるならば、最低3期の集落を考えられる。

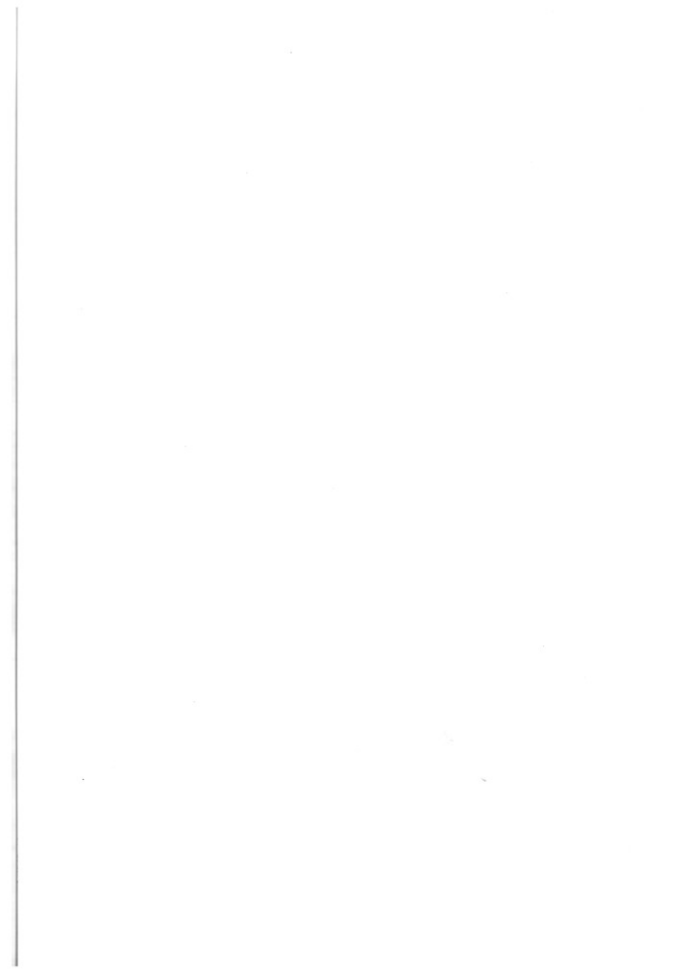
掘立柱建物の時期については、出土遺物や、後述する井戸の時期との関係から、10世紀後半から13世紀後半ぐらいまでの間と考えられる。

井戸については、SE01と06は出土遺物の状況からして時期の確定はむずかしいが、SE02は12世紀中葉～後半、SE03は出土した黒色土器から10世紀の後半、SE04は13世紀後半、SE05は13世紀前半のものであると考えられる。



図

版





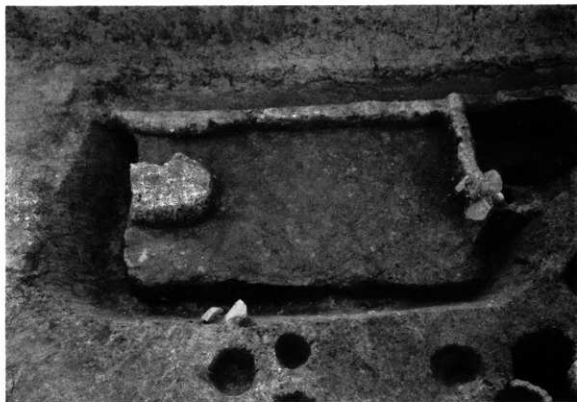
調査区 (北より)



同上 (南より)



調査区(東より)



SC 01



SC 05



SC 06



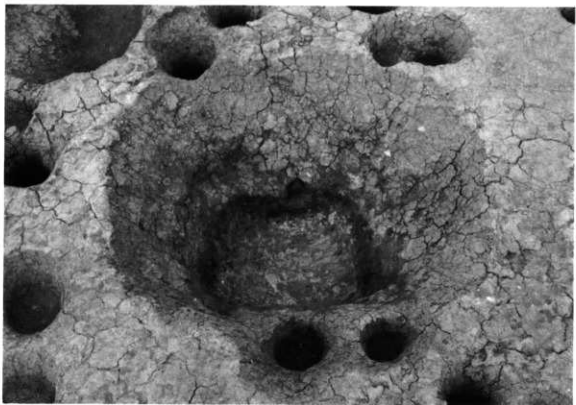
SE 01



SE 02



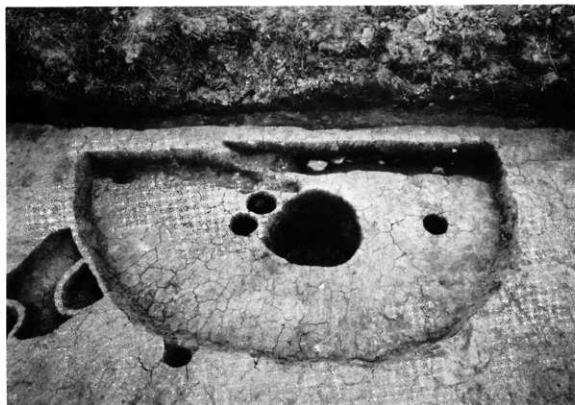
SE 03



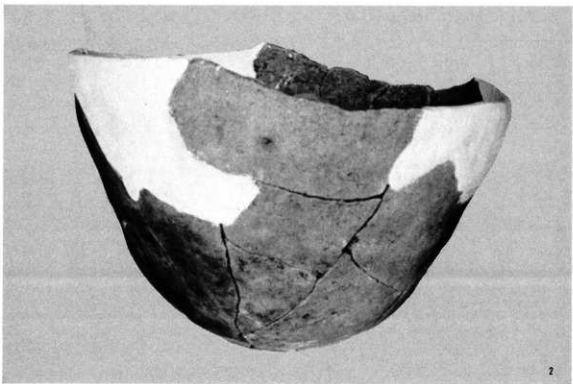
SE 04



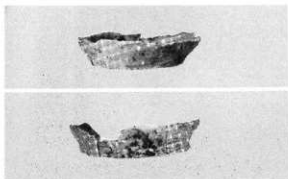
SE 05



SE 06



SB02



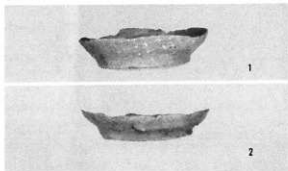
SB11



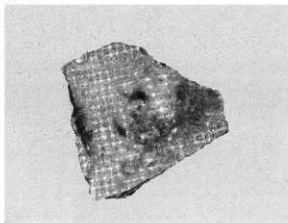
SB12



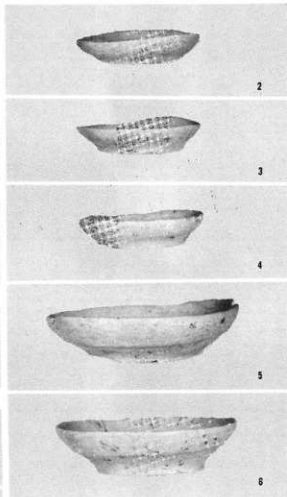
SB13

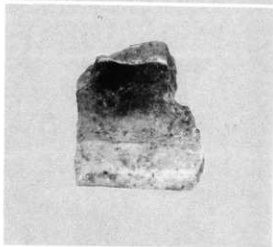
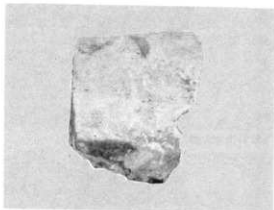
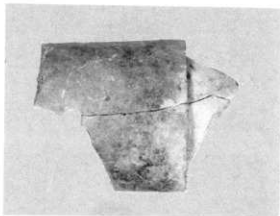


SB16



SB17





SE02・04出土土器



1



15



2



16



3



17



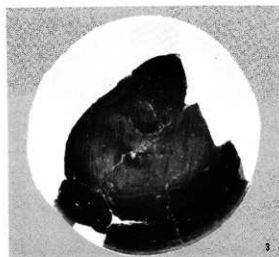
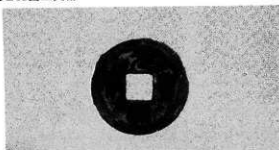
20



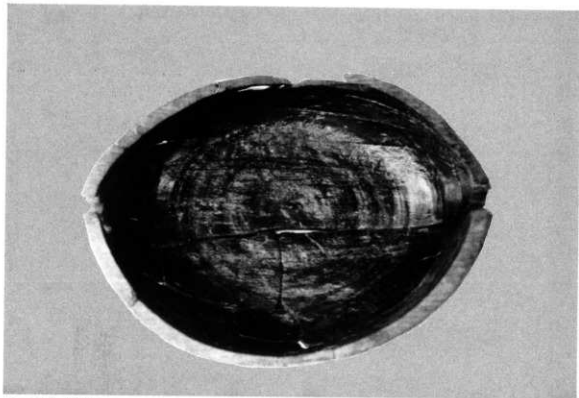
SE 03出土土器



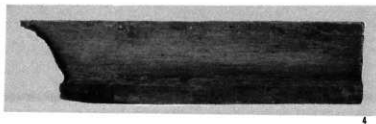
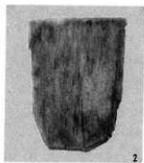
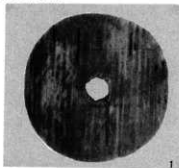
SE 02出土貨幣



SE04出土木製椀

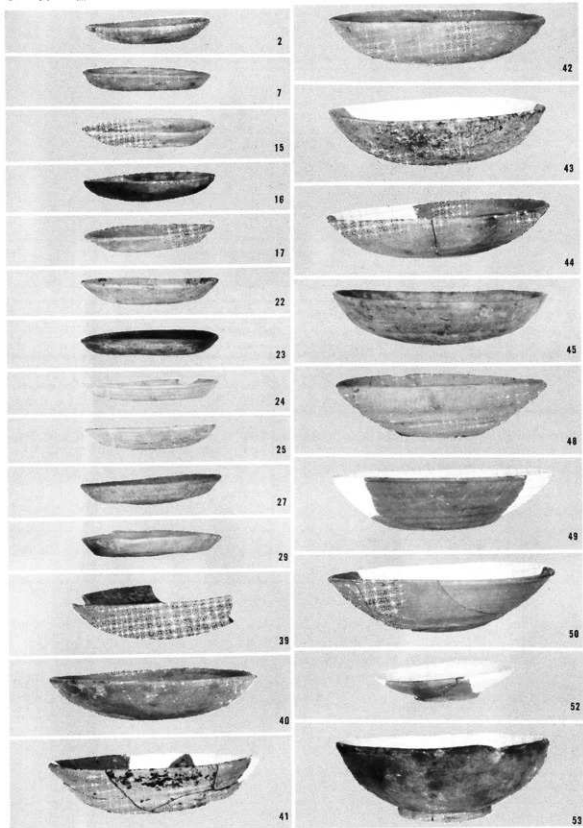


SE05出土木製品

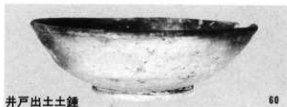
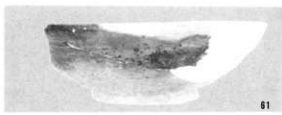


图版 12

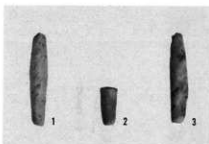
SE 05出土土器



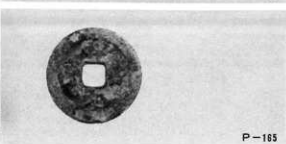
SE 05出土土器



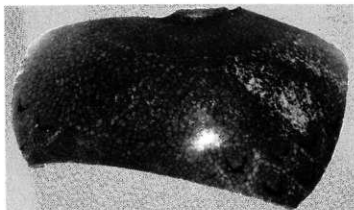
井戸出土土器



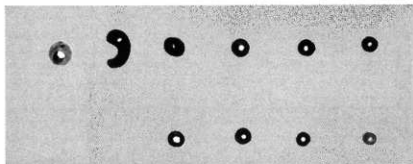
ビット出土遺物



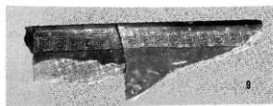
P-204出土高麗青磁



P-41出土玉類



包含層出土土器



包含層出土石器



1

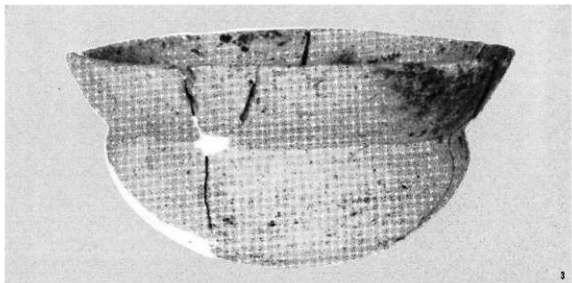
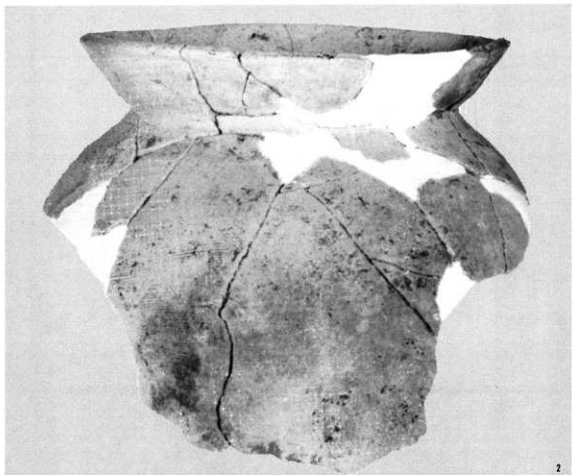


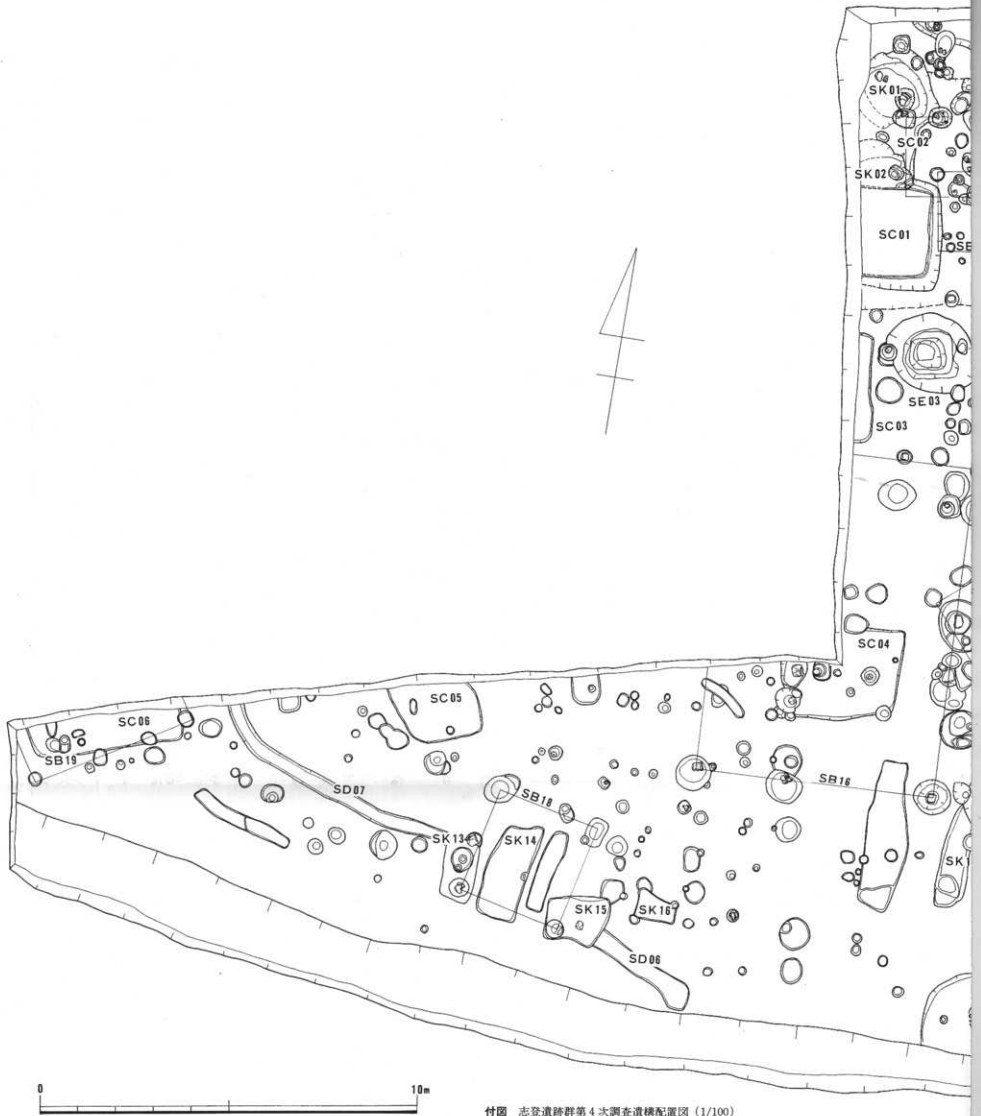
2

下層出土土器

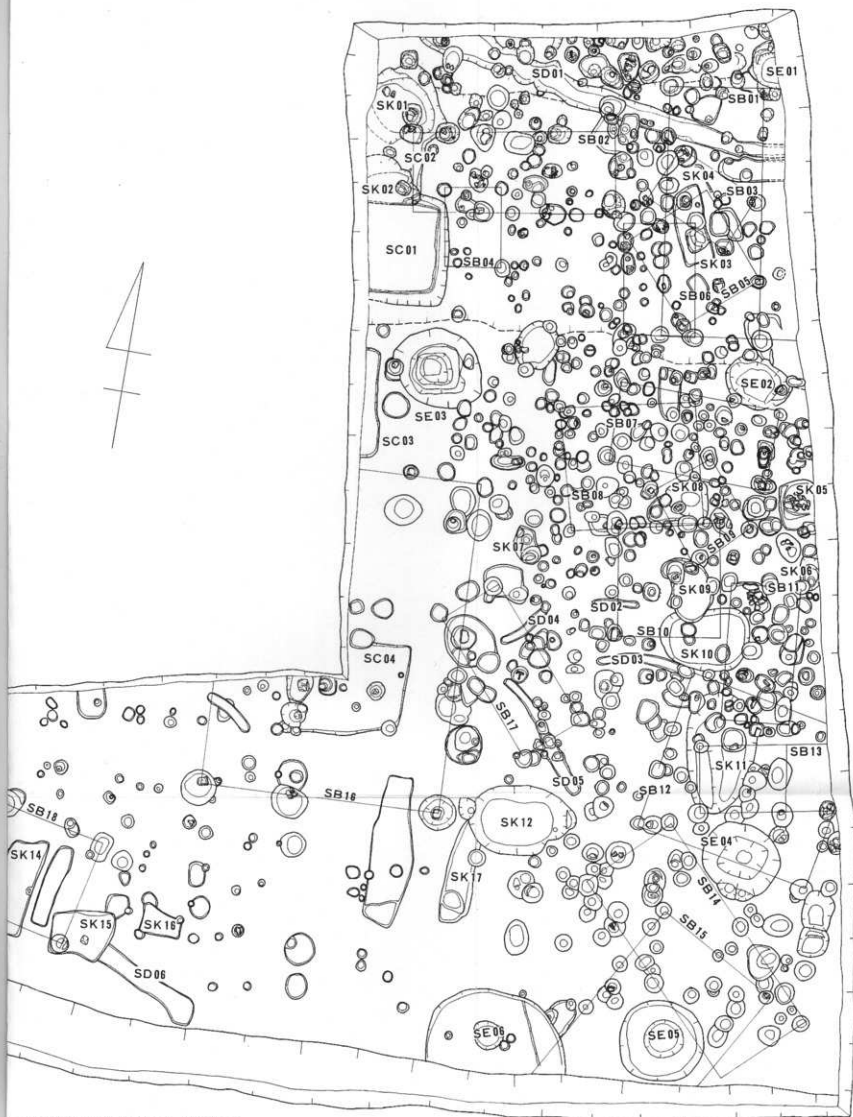


1





付圖 志登遺跡群第4次調査遺構配置圖 (1/100)



志登遺跡群第4次調査遺構配置図 (1/100)

志登遺跡群

第4次発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第20集

昭和60年3月30日

発行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31

